

異能力者 異世界にて、斯く戦えり

クラウディ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Q. もしも地球には魔法や呪術などが存在していて、現代になつてもそれらを使うことが出来る人間がいたなら異世界はどうなるか？

A. 無双ですね分かります。

思いついたら投稿する作品です。
感想をくれると励みになります。

目次

もし、ゲートの地球が……	1
会見 異能力者について語るスレ 少しの会話	7
異能力者達のスレ	23
異世界への一歩	45
伊丹のお話	55
集う者達	63
番外編 柊木達の模擬戦	68
炎龍	84
アルヌスの丘にて	92
死神ロウリイと重機関車	103

もし、ゲートの地球が……

20××年 夏

その日は、蒸し暑い日であったと記録されている。

気温は摂氏30度を超え湿度も高い、ヒートアイランドの影響もあつて、街は灼熱の地獄と化していた。

にもかかわらず土曜日であったために、多くの人々が都心へと押し寄せ、買い物やウインドウショッピングを楽しんでいる。

午前11時50分。

陽光は中天にさしかかり、気温もいよいよ最高点に達しようとした頃、東京都中央区銀座に突如『異世界への門』が現れた。

中から溢れだしたのは、中世ヨーロッパの鎧に似た武装の騎士と歩兵。

そして……ファンタジーの物語や映画に登場するようなオークやゴブリン、トロールと呼ばれる異形の怪異だった。

彼等は、たまたまその場に居合わせただけの人々へと襲い掛かった。

老いも若きも男も女も、人種国籍すら問われなかった。

それは、あたかも殺戮そのものが目的であるかのようなだった。

平和な国の平和な時代であることを慣れ親しんだ人々に抵抗の術はなく阿鼻叫喚の惨劇の中で次々と倒れていった。

買い物客が、親子連れが、そして海外からの観光客たちが次々と馬蹄に踏みにじられ、槍を突き刺され、そして剣によってその命を絶たれた。

累々たる屍が町を覆い尽くし、銀座のアスファルトは血の色で赤く舗装された。

その光景にあえて題字をつけるならば『地獄』。

異界の軍勢は、積み上げた屍の上に更なる屍を積み、そうして出来た肉の小山に漆黒の軍旗を掲げたのである。

そして彼等の言葉で、声高らかにこの地の征服と領有を宣言した。

それは聞く者の居ない一方的な宣戦布告だった。

『銀座事件』

歴史に記録される異世界と我等の世界との接触は、後にこう呼ばれることとなった。

~~~~~

と、いうのが本来の歴史だ。

しかし、ある世界ではこうはならなかった。

何故か分かるかい？

知りたいのならば次を見てくれ。

~~~~~

本来なら、街行く人々の喧騒により、ここが極東にある島国「日本の都心だ」ということを否が応でも分からせてくれる場所「銀座」は、現在、未曾有の災害に見舞われていた。
突如として現れた、鎧を着こんだ者達と明らかに人間ではない異形の者達。

戦う力を持つ必要すらなく、普通に生を謳歌していた一般人達は、武器を持った彼等によって次々と殺されていったのだ。

見知らぬ人、近くにいた人、友人、恋人、家族……それらが目の前で殺されてしまった人々は、パニックになって逃げだし、一斉に動いた人の波によって続々と転倒するものが現れる。

そして、逃げ遅れた者が殺されていく。
いや、逃げ遅れていなくても殺されるだろう。

現に、空から急降下してきた竜「ワイバーン」に乗った者の握る槍
によって貫かれる者達が出ているのだから。

これらの状況は、はつきり言って非常によろしくない。

誰しもが生きたいと願った行動の末に、死者が出るのは別段不思議
なことではないが、そもそもそこにいたのは一般人。

このような非現実的な光景を目にしてパニックにならないもの
方が少ないのである。

要するに「仕方がない」というやつだ。

そして今も、ある母娘が殺されようとしている。

母が娘を抱きしめながら、顔を蒼白に染め、背中に走る恐怖心を押
し殺しながら逃げようとしていた。

抱きしめられている娘は泣きじやくり、母親の腕の隙間からある方
向へ手を伸ばしている。

その先には、男性の遺体があった。

おそらく少女の父親なのだろう。

さしづめ、家族一緒に買い物へ、と外出していたら奴等に襲われ父
親が犠牲になった……という、今、この場ではありふれている事件だ。

だが、ありふれているからと受け入れられるわけではない。

母親が、侵略者達から逃げようと駆けだした次の瞬間、

不幸にもオシヤレの為と履いていたハイヒールが仇となり、バラン
スを崩して転んでしまう。

その際、娘も腕から投げ出されてしまい、一刻の間転がり続けて動
かなくなってしまうた。

母親の表情が絶望に染まる。

先程振り返った時、侵略者達との距離は、あと数メートルとなかつ
たのだ。

今から起き上がって娘を助けに行く時間もない。

顔だけ振り返ると、そこには剣を振りかぶる侵略者の姿が。もう駄目だ。

と、せめて痛みを感じる瞬間を捉えないようにと目を瞑った――

次の瞬間。

「消えろ」

底冷えするような声と共に轟音が鳴り響く。

まるで雷が落ちた瞬間のような、そんな音が戦場に木霊する。

これには、侵略者達も動きを止めざるを得なかった。

迫りくる死の瞬間が訪れないことに気がついた母親は、恐る恐る目を開く。

先ほどまで、侵略者が立っていた場所に誰かが立っている。

そこに立っていたのは……

男だった。

杖を突いた男だった。

どこか浮世離れたした雰囲気漂わせる男だった。

着ている衣服を、全て黒で統一した男だった。

そして、

「突然、空間の揺らぎがあったと思ったら、異世界に繋がって、そこから軍勢が攻めてくる……はあ……ふぎけるのも大概にして欲しい現象だね」

この場に最も合っている似合わない男だった。

思わず困惑したように周囲をキョロキョロと眺めていると、ある部分が目に入る。

それは男の前だ。

まるで、円形の重い何かによって潰されたようにへこんだアスファルト。

その中央には紅いケチャップがぶちまけられていた。
いや、ケチャップではないだろう。

きつとそれは血のはずだ。

そうでなければ、広がる血の上に置かれている押しつぶされた^{鉄板}鎧があるのはおかしいからだ。

「やごと……」

男が茫然とするこの場の全員を置いて、侵略者達に向かって杖を掲げる。

そしてブツブツと何かを呟きだした。

しばらくして、ようやく硬直から解けた数人の侵略者達が一般人を襲い始め……ようとした。

何故、『ようとした』なのか。

それは、動こうとした侵略者達が一步を踏み出そうとした次の瞬間には頭部が消し飛ばされたかのようになくなり、一斉に崩れ落ちたからだ。

「君達には、後で話を聞かせてもらおうことにしよう。さてと……」

非現実的とはいえ、おそらくそれを成したであろう男は、未だ呆然とする侵略者達に向かって歩いていく。

ようやく正気に戻った侵略者達だったが、仲間が一瞬にして殺される光景を見せつけられてしまい、ほとんどが恐慌状態となってしまうた。

あれは何だ？

魔法なのか？

そもそもあの男はどこから来た!?

さつきまでいなかったはずだ!?

そんなことが侵略者達の間で飛び交う中、その男は次々に侵略者達を殺害していく。

鎧を纏った者も、異形の者も、空を飛ぶ竜の背に乗る者も、立ち向かおうとした者も、逃げようとした者も、皆等しく死んでいった。

しかし、訳が分からない現象が目の前で繰り広げられているのを見た者達の反応は二つに分かれていた。

男を「敵」とみるか、「救世主」とみるか。

これが後に『銀座事件』と呼ばれるものであり、

『異能力者認知事件』と呼ばれるものの始まりの一日であった。

会見 異能力者について語るスレ 少しの会話

—— それでは、「異能力者」というものについての説明をお願いします。異能力者という人種が所属する組織、その日本支部「神祇省」のトップである「柊木真」さん？

「そうですね……では、直球で行きますか。皆さんは、魔法などが実際に存在すると言われても信じることができますか？ まあ、普通は無理ですよ。僕の友人がこのことについて何も知らない状態だったならば、すぐさま病院へ行って来いと頭を抱えながら言うでしょう。それほどまでに荒唐無稽な話をします。混乱しないようにある程度の覚悟はしておいてください」

—— ……覚悟はしています。

「分かりました。では始めましょうか。僕たちのことを——」

【総司令】 異能力者について語るスレ31回目【意外と普通】

359：774の一般人

そろそろ落ち着いてきた頃か？

360：774の一般人

たぶん……

361：774の一般人

いやあ……いろんなことが立て続けに起こったせいで、まだ混乱しっぱなしだわ

362：774の一般人

仕方ねえよ

突然、異世界への門が開いたとか受け止めきれなくて当然のこと

だっというのに

363 : 774の一般人

死んだ人もいるからな……

364 : 774の一般人

>>363

不謹慎だぞ

365 : 774の一般人

>>364

すまねえ

俺って、テレビで見ただけだからさ

まだ実感がわかないんだよ

366 : 774の一般人

>>365

それでも、死者について触れるのはダメだぞ

367 : 774の一般人

>>366

分かった

これからは触れないようにする

368 : 774の一般人

それでいいんだよ

んで、今回分かったことは何だっけ？

369 : 774の一般人

>>368

あの時、前線で戦ってくれた異能力者(?)達のトップが直々に話

してくれたやつか

370：774の一般人

>>369

あの人には感謝してるわ

あの人のおかげで嫁も子供も無事だったからな

371：774の一般人

>>370

それな

あの人のおかげで死者も最低限に抑えられたし

372：774の一般人

でも……亡くなった人は何人か出ちやったし……

373：774の一般人

>>372

シッ!

それについては触れないの!

374：774の一般人

>>373の言う通りやな

あの人のおかげで助かった人もいるけど、助けられなかった人もいる

今回の取材でも言ってる

あの人は政治的な意味で大分無茶して人助けに向かったって

375：774の一般人

ごめん

でも、ダチが死んじやったからさ……

まだ受け入れられなくて……

あいつ、あの日にあったコミュニケーションに楽しんでたんだよ
今でもあいつの楽しみ過ぎてたまらないって笑顔が脳裏にちらつ
いてさ……

あの人が殺したわけじゃないのは分かってるんだけどさ……
どうしてもあの人がもっと早く来てくれたらあいつも助かったん
じゃないのかって思ってたさ……

376 : 774の一般人

……

377 : 774の一般人

……

378 : 774の一般人

……

379 : 774の一般人

……

380 : 774の一般人

……

381 : 774の一般人

……

382 : 774の一般人

……

383 : 774の一般人

すまん

変な話した

しばらくROMつてる

384 : 774の一般人

……

385 : 774の一般人

……

386 : 774の一般人

……

387 : 774の一般人

……

388 : 774の一般人

……

389 : 774の一般人

よし

すぐ切り替えろ

馬鹿な俺達には簡単なことだろ

390 : 774の一般人

そうだな

反省はしても後悔はするなってどこの誰かも言ってたしな

391 : 774の一般人

さて、異能力者のことだな

誰か説明できるか？

392 : 774の一般人

ああ、俺ができる
しばらく待ってくれ

393 : 774の一般人
おK

394 : 774の一般人
了解

395 : 774の一般人
よろしく頼む

396 : 774の一般人
頼んだ

397 : 774の一般人
じゃあ、>>392が戻ってくるまでしばらく駄弁ってるか？

398 : 774の一般人
>>>397

暗い空気で話しても飯がまずくなるだけだしな
その案採用しよう

399 : 774の一般人
でも何話すんだ？

400 : 774の一般人
俺のマル秘な本（意味深）を朗読するか？

401 : 774の一般人
なにそれkws k

402：774の一般人

k t k r

403：解説

待たせてすまん

異能力者とは、遙か昔から続く魔法や呪術といったオカルト的技術を管理し、悪用した者を取り締まる者達のことを言う

異能といっても、漫画にあるような人それぞれの能力のことを指すのではなく、一般人には出来ないようなこと（魔法や呪術、超能力）を統合したものの名称らしい

神祇省は、表としては神祇の祭祀と行政を掌る機関として律令制以来の神祇官に代わって設置されたものことだ

裏は今回戦ってくれた人達みたいに異能を行使する人達が所属しているとのことだ

ついでに言えば、異能力者とは本来秘匿されるべきものであり、今回みたいな公に能力を使うのは許されていないそうだ（型月の魔術師みたいな）。

404：774の一般人

>>403

これは有能

405：774の一般人

はえくそんなのが昔からあったんですね

406：774の一般人

>>403

マル秘ニキの話も気になるけど、やっぱり話題の話だよな

407：774の一般人

>>>403

えーっと、魔法とか呪術とか全部ひっくるめて「異能」っていうのか

408：マル秘

何それ俺の話より面白そうじゃん

409：774の一般人

>>>408

マル秘ニキwww

410：774の一般人

>>>408

コテハンつけたのかwww

411：774の一般人

要するに、異能力者ってファンタジーな警察ってことか？

412：774の一般人

>>>411

たぶんそうじゃないの？

よく分からんけど

413：774の一般人

んー好き勝手できるわけじゃないのか
いや、国の組織だからそういうもんか

414：774の一般人

なんで、能力を使えないんだろう？

それだったらもっと早く行けてたはずなのに

415：解説

>>414

ヒント：テロリスト、反社会的勢力

416：774の一般人

>>415

あ……

417：774の一般人

あーなるほど

418：774の一般人

え？ どういうこと？

教えてエロい人！

419：解説

>>418

別にエロくはないが……

あの人の戦闘した場所知ってるか？

アスファルトがアニメでみたいにデカイクレーターができていた
り、異世界の兵士達が軒並み瞬殺されていたんだよ

こんな力をテロリストどもが手に入れたりでもしたら、あの悲劇”

9.11”が簡単に引き起こせるんだぞ

そうなったら災害なんて目じゃない”^{ラグナロク}神々の戦争”が引き起こさ
れる

そこかしこで戦争が起きるだろうな

420：774の一般人

>>419

ヒエ……

4 2 1 : 7 7 4 の一般人

>> 4 1 9

だから今まで隠してたんですね (RTA並感)

4 2 2 : 7 7 4 の一般人

>> 4 1 9

文字にしなくても分かるヤバさ

4 2 3 : 7 7 4 の一般人

つてことは、あの人はそれが引き起こせるのにやろうとしないんだ
普通だったら、大きすぎる力に溺れそうになるはずなのに

4 2 4 : マル秘

溺れてないから組織のトップにいるんだろ

4 2 5 : 解説

続き

総司令こと「柊木真」は、日本の異能力者によって構成されている
組織「神祇省」のトップである総司令の席に就任している

強さは「特級」らしい

そもそも、異能力者には自衛隊とかみたいに階級が存在する

下から「下級」、「中級」、「上級」、「特級」とあり、それぞれ

下級：戦闘能力は武術を収めた者とほぼ変わらない

拳銃で応戦可能

それぞれ弱いながらも魔法を行使可能

中級：下級を三回りぐらい強くしたような戦闘能力

拳銃で撃たれても死なないぐらいに頑丈

車一つを破壊することが可能な魔法が行使可能

上級：漫画の役役をはれるぐらいの強さ

戦車砲で撃たれても生きているぐらいには頑丈

戦車を簡単に破壊可能

特級…次元が違う強さ（ピンからキリまで幅広い）

戦艦の大砲を喰らってもピンピンしているらしい

一人で一つの軍勢と戦えるぐらいには頭おかしな強さをしている

そして、柊木さんは特級の中でも「最強」の二つ名を持つらしい

4 2 6 : 7 7 4 の一般人

>> 4 2 5

ええ……

4 2 7 : 7 7 4 の一般人

>> 4 2 5

なあにこれえ……（デュエリスト並感）

4 2 8 : 7 7 4 の一般人

>> 4 2 5

まるで意味が分からんぞ！（デュエリ r y）

4 2 9 : 7 7 4 の一般人

ハルトオオオオオオオオ!!

4 3 0 : 7 7 4 の一般人

こんなところでも叫ぶ兄さんは嫌いだ

4 3 1 : マル秘

やっぱり日本は修羅の国だぜ！

4 3 2 : 7 7 4 の一般人

なるほどねえ……

そりゃ、そんな強さしてたら隠すよな
それもあの日までか

433 : 774の一般人

不謹慎だけど、そこらにいる人が拳銃を常に持っているようなものだからね

そりゃ、隠すでしょ

434 : 解説

さらに続き

異能力者達は、何もその能力を悪用する者を取り締まるだけではなく、こことは別の世界 “反転世界” から来る怪物 “怪異” を討伐する義務もある。

怪異つてのは、昔話とか神話とかでよく出て来る妖怪や妖精、獣なんかのことを言う

要するに、昔から続く神話なんかは実際にあつたことらしいってさ
そして、現在も公には知られていなかったが、怪異達はこつち側に
来て人を襲うらしい

時々ニュースであるだろ？

突然行方不明になつたつていう人達のこと

435 : 774の一般人

>>434

解説ニキ、すごい詳しいね

436 : 774の一般人

>>434

はえくやつぱり犯罪者を捕まえるだけじゃなかったんですねえく

>>435

たし蟹

解説ニキやたら詳しいな

437 : 774の一般人

>>435

どういうことだ解説ニキ？

洗いざらい吐いてもらおうか

438：マル秘

沈黙は肯定とみなすぜ！

439：774の一般人

>>438

マル秘ニキ、なにをだよ

440：774の一般人

>>435

でも、確かに気になるんだよな

解説ニキ、話してもらおうよ

441：解説

>>435

>>436

>>437

>>438

>>439

>>440

スマン

仕事が入ったわ

442：774の一般人

ちよ

443：774の一般人

逃げるな卑怯者——！ 逃げるな——！

~~~~~

「……で、これでよかったのか？」

とある場所の一角にあるベンチに座る男——伊丹耀司いたみ しょうじは反対側に座る男に問いかける。

伊丹の顔は疲れたように少しやつれていた。  
無理もないだろう。

彼は、あの日、この地球が異世界に繋がった瞬間にその場へと居合わせていた者であり、掲示板内で話題に出された異能力者が現場に到達するまで多くの民間人を逃がしたという偉業と言う他無いことを成したのだから。

実際は、同人誌即売会が中止になってたまるかという一心で動いたとのことだが……

それはともかく、彼の問いかけに対し、反対側に座る男は重々しく頷き肯定する。

「あのスレにいた者達にはすまないが、あそこから広げることも良いと判断したからだ」

「……本当か？ いっそゲロっちまえよ。コレ、思い付きだつて」  
口を開いた男は顔を上げて、伊丹の顔を真っ直ぐに見据える。

今まで伏せられていた顔が向けられたことで、部屋の天井から降り注ぐ明かりによってその顔の細部が分かる。

眼鏡を掛けた精悍な顔立ちをしている男の目元には眼鏡のフレームでも隠せないほどに濃い隈が出来ており、おそらくここ数日寝ていないことが察せられ、更に眉間には深い皺が出来ており、彼の気難しいであろう性格と苦勞人気質を表していた。

「馬鹿な。この俺の計算に狂いは……ZZZZZZZZ……ハッ！」  
「……大丈夫かよ、本当……あの日以降寝れてないんだろ、木場」

？」

伊丹に木場と呼ばれた男——木場義秀きばよしひでは自信満々に計画の成功率を話そうとした瞬間、いびきを立てて眠りかける。

そんな木場に対し、気遣うような言葉をかける伊丹。

「で、実際はどうなんだ？ 柗木さんが関係各所に対応してるんだけど、それだけじゃ情報が規制されるかもしれないとスレに流してみたらいいんじゃないのか？ って言ったのはお前なんだろう？」

「……ああそうだ。あそこには海外の記者もいた。柗木も動いた。遅かれ早かれ、世界に異能力者のことが知れ渡るのも時間の問題だ。その時間も誤差程度でしかないのは明らか。隠蔽し続けければ、国民の不満も高まるだろう。なら、いつそのこと世界に情報をさらすしかない。ニユースでは都合のいいように情報が書き換えられるかもしれない。だからこそ、今回みたいにスレに情報をさらしたんだ」

伊丹の問いに、眠りかけた際にズレた眼鏡をなおした木場は、溜息から漏れ出るかのように言葉を紡いでいく。

「はあ……面倒なことが起きたもんだな……俺はただ同人誌即売会に行きたかったっていうのに……」

「……それだけで人を助けるお前も大概だがな。お前みたいな奴が俺の部署に来てくれたらどれだけ楽か……」

「そういうのは御免被るぜ。俺は「食う寝る遊ぶ、その合間にほんのちよつとの人生」を掲げているんでな。お前みたいな過労死寸前な部署には行きたくないんでね」

「……いつそのこと、無理やりにも連れて行くか……？」

「おい待てコラ。変な考え思いつくなよ！ 構えんな！」

伊丹と会話を続けていた木場だったが、突然立ち上がり、拳を構えたかと思うと、不穏な空気を纏いだす。

それに対し、椅子から転げ落ちた伊丹は、部屋の隅へと退避した。一触即発の空気の中、それを破るように部屋の扉が開く。

入ってきたのは黒づくめの男——柗木真だった。

「やあ！ 二人とも、元気かい？」

「生憎のところ、お前の相棒に襲われそうになっているんだよ」



「柀木、邪魔をするな。この男を仲間に入れて、俺は少しでも仕事を減らすんだ」

「うんうん！ 解放されたいじゃなくて、あくまで減らしたいというのが木場らしいね。休暇を出すから奥さんと共に旅行に行きなさい」  
周りを見回した柀木はとりあえず事情を聞き、危ない目をしている木場を宥めてすぐさま休暇届を懐から出して木場に投げつける。

それに跳びついて残像ができるほどの速度で懐にしまった木場は姿勢を正した。

心なしか、目の隈と眉間によつていた皺が減つたように感じる。

「で、お前が来たということは、話が終わったということ……ではないな」

「うん。この後も取材の依頼が何件か来ている。君達にも話があるとのことだ」

「うへへ……有給降りるのかこれ？」

「諦める伊丹。上の連中はてんやわんやの大騒ぎなのだから、自由に動ける俺達に依頼が来るのは当然の流れだ。特に、お前と柀木は当事者なんだからな」

「へいへい……つたく、仕方ねえな！」

「話はまとまったようだね。それじゃあ行くこうか」

愚痴を言う木場と伊丹を引き連れて、柀木は部屋から出ていった。

残された部屋には静寂が漂う。

彼等が向かった先には、そことは正反対であるのに。

## 異能力者達のスレ

【異世界からの侵略】最近平和だと思ってたらコレだよ！【マジふざけんな】

334：774の隊員

異世界はクソだということです（ナナミン）

335：774の隊員

はい人生はクソゲー

336：774の隊員

ただでさえ忙しいのに……

ちったあ空気を読んでほしいもんだね（半ギレ）

337：774の隊員

こちとら久しぶりの休暇だっていうのに……

嫁と子供が怪我したんだぞ！（全ギレ）

338：774の隊員

ええ、元凶をぶっ飛ばさなければなりませんね

行きますよ！ ○ーボンさん！ ド○リアさん！（FR—Z並感）

339：774の隊員

お前を殺す（デデン！）

340：774の隊員

まずはお前から血祭りにあげてやる……！（BR—並感）

341：774の隊員

ぶっ飛ばす……！

ぜってえ許さねえ！ (K Z R B K U T 並感)

3 4 2 : 7 7 4 の隊員

獣は狩らねばならぬな…… (狩人様)

3 4 3 : 7 7 4 の隊員

どいつもこいつもブチギレてて草

まあ俺もなんだけど (全ギレ)

3 4 4 : 7 7 4 の隊員

人生で初めてだよ……

ここまでキレたのは……！

3 4 5 : 7 7 4 の隊員

そもそもなんだよ？

いきなり現れたと思つたら、「ここを我が国のものとする！」だっけか？

時間をかけて戦争問題が沈静化してきたこの日本でよお……白昼堂々戦争を起こしてさあ……

それも武力を使って一般人殺しまくってよお……

3 4 6 : 7 7 4 の隊員

頭畜族かよ

3 4 7 : 7 7 4 の隊員

>>3 4 6

最高の悪口で草 w w w w

草……

348：774の隊員

草に草を生やすな（戒め）

……つて、言つてられない状況だけどな

349：774の隊員

よし、そろそろ愚痴も出尽くしただろうから、本題行くぞ

350：774の隊員

お

351：774の隊員

お

352：774の隊員

……つっても、本題と言つたつて、何話せばいいんだ？

353：774の隊員

あの頭畜族集団のことでも話すか？

354：774の隊員

うん……

非常に癪だが、それ以外ほとんどないしな  
というわけで話していくぞ

355：774の隊員

クソ野郎共

356：774の隊員

戦争時代の忘れ物（悪口）

357：774の隊員

平和を乱す侵略者

358：774の隊員

吐き気を催す邪悪

359：774の隊員

マーベル作品の悪役（の配下）

360：774の隊員

典型的な悪役（雑魚）

361：774の隊員

タール殿に「うわあ……」と言われた奴等

362：774の隊員

異世界なんてクソだということを証明した者達

363：774の隊員

せつかくの休み&同人誌即売会を壊したバカ野郎

364：774の隊員

総司令が問答無用で殺しにかかった奴等

365：774の隊員

「やっぱファンタジーってクソだわ」

そう言わざるを得ないほどのことを成したファツキン共

366：774の隊員

おおう……（引き）

各々の恨みがこもった呼び名だな……

367：774の隊員

実際そうでしょ？

こんな進んでいる社会に、交渉もせず問答無用で攻撃を仕掛けてきたんだから

368：774の隊員

今時武力で戦うのは……ねえ……？

369：774の隊員

それに関しちや、同感と言わざるを得ないな

370：774の隊員

久しぶりに総司令が俺ら全員に休暇を言い渡してまで民間の守護に回したと思ったら、今回の出来事が起こったからな

371：774の隊員

もし俺等が仕事に言ってたと思つたら……ゾツとするな

372：774の隊員

ああ……

う 確実に対応が遅れて、今回以上の死体の山が出来上がっていただろ

373：774の隊員

そう考えると……総司令様様だな

374：774の隊員

いつものことだが、総司令が有能すぎて申し訳なくなってくる

375：774の隊員

でも、今回のことを告知しておかなかったのは許さん

376：774の隊員

仕方ないんじゃないか？

流星に今回ののは確実性のなさすぎる異世界の問題だ

俺等の総司令が尋常じゃない力を持っていたとしても、今回の出来事を予知するのは不可能だろ。

377：774の隊員

予言科に所属している知り合いも「大きな災害が訪れるのは予知できた。でも、異世界から侵略してくるのは予測できなかった」って言ってたぞ

378：774の隊員

!!??

379：774の隊員

おまつ、予言科の連中と知り合いなのかよ!!

380：774の隊員

いいなー!

羨ましいなー!

381：774の隊員

え？

そんな反応が出るほどなのか？

予言科と知り合いなのって？

382：774の隊員

知らないのか>>381!?

383：774の隊員

え、ええ

まあ、最近入ったばかりですし……

384：774の隊員

仕方ない……

俺が解説してやろう！

385：774の隊員

!?

386：774の隊員

か、解説!?

ということは……!?

387：解説

そう！

俺こそが、掲示板内に突如出沒する解説担当！

ゴシツプ、最新情報何でもござれ！

ある意味では総司令と肩を並べるほどの有名人！

解説だあああああああ！

388：774の隊員

ウオオオオオオオオオオ!!

389：774の隊員

解説ニキだあああああ!!

390：774の隊員

祝え！ 解説ニキの登場である！



391：774の隊員

え、ええ……

392：774の隊員

相変わらずの解説ニキの人気

393：774の隊員

確か……フアンクラブも出来たんだっけ？

394：774の隊員

おお！ フアンクラブ！

解説ニキも出世したんだな！

395：774の隊員

つてか、反応www

訓練され過ぎだろwww

396：774の隊員

解説ニキが登場すると、某動画サイトの人気動画レベルのものになるんだよなあ……

397：解説

祝つてくれてありがとう！

それでは解説に入っていこう！

予言科とは、これから起こるであろう事件や災害などを異能を行使することで、被害を未然に防ぐor最小限に抑えることを目的とした部署だ！

そこに所属するということは、様々な人の命を預かると言っても過言ではないことを行い続けるため、選考基準は非常に高く、実力者しか集まらない修羅の部署とも言われている！

398 : 774の隊員  
おぉ……

399 : 774の隊員

流石は解説

非常に分かりやすい

400 : 774の隊員

な、なるほど……

でも、皆さんが喜ぶ理由はやっぱり、そんなすごい人を尊敬しているからなんですか？

401 : 774の隊員

………

402 : 774の隊員

………

403 : 774の隊員

………

404 : 774の隊員

………

405 : 774の隊員

………

406 : 774の隊員

ええつと……

407：774の隊員

ううむ……

408：774の隊員

え？

なんですかその微妙な反応は？

409：解説

実は、予言科の人達は様々な名家から輩出されるからなのか、美男美女がそろっているため、あわよくば彼等彼女等とお近づきになりたい者達もいるのだ（ボソツ）

410：774の隊員

は？

411：774の隊員

うおい!?

412：774の隊員

ばらすな解説う!?

413：774の隊員

そんなことを思ってたんですか皆さん？

414：774の隊員

ヒエツ……!?

415：774の隊員

（おそろく）新人君から凄まじい侮蔑の色が……!

416：774の隊員

許し亭……許し亭……

4 1 7 : 7 7 4 の隊員

許してください！ 何でもしますから！

4 1 8 : 7 7 4 の隊員

ん？

4 1 9 : 7 7 4 の隊員

ん？

4 2 0 : 7 7 4 の隊員

ん？

4 2 1 : 7 7 4 の隊員

ん？

4 2 2 : 7 7 4 の隊員

ん？ 今なんでもするって言ったよね？

4 2 3 : 解説

おい、お前ら

ネタに走るのもいいけど、ちゃんと周りを見ろよ

4 2 4 : 7 7 4 の隊員

ん？ (後ろクルツ)

4 2 5 : 7 7 4 の隊員

はい？ (後ろクルツ)

4 2 6 : 7 7 4 の隊員

なんだ？（後ろクルツ）

4 2 7 : 7 7 4 の隊員

いやな予感が……（後ろクルツ）

4 2 8 : 肅清科

お待たせ

4 2 9 : 7 7 4 の隊員

あ……（察し）

4 3 0 : 7 7 4 の隊員

終わったな……（諦め）

4 3 1 : 7 7 4 の隊員

夢を追って死ぬとは……これもサイヤ人の定めか……（辞世の句）

4 3 2 : 7 7 4 の隊員

俺、生まれ変わったら美人な嫁さんを貰うんだ……！

4 3 3 : 肅清科

成敗！

4 3 4 : 7 7 4 の隊員

アツー！

4 3 5 : 7 7 4 の隊員

アツー！

4 3 6 : 7 7 4 の隊員

アツー！

437：774の隊員

アツ♂

438：肅清科

悪は滅びた！

それでは皆さん、失礼しました！

おい！ 行くぞお前等！

439：774の隊員

……………  
(ズルズル)

440：774の隊員

……………  
(ズルズル)

441：774の隊員

……………  
(ズルズル)

442：774の隊員

止まるんじやねえぞ……………！  
(キボウノハナー)

443：774の隊員

Ω\ζ) チーン

444：774の隊員

南無南無……………

445：774の隊員

ワザマエ！

隣れ、スレ民は肅清Ⅱサンの手によってしめやかに爆発四散！

4 4 6 : 7 7 4 の隊員

な、なんて奴だ……！

4 4 7 : 7 7 4 の隊員

え？ え？ 誰ですか今の人？

4 4 8 : 7 7 4 の隊員

彼の名は肅清さん

このスレを監視する「肅清科」の一人で、不用意な発言をするのな  
らすぐさま肅清しにかかる恐ろしい人だ。

と言っても、肅清するのは友人とか限定なので新人君は大丈夫だと  
思うよ？

4 4 9 : 7 7 4 の隊員

でも不用意な発言をしたら、帰り道に黒づくめの男がやって来て注  
意しに来るから気をつけてね！

4 5 0 : 7 7 4 の隊員

わ、分かりました……？

4 5 1 : 7 7 4 の隊員

ってか、スレの内容がズレてんな

4 5 2 : 7 7 4 の隊員

あ

4 5 3 : 7 7 4 の隊員

そうだった！ 俺達はあのクソ野郎のことを話しに来たんだった  
！

4 5 4 : 7 7 4 の隊員

でも、話すことなんかなくない？

455：774の隊員

ところがぎつちよん！

これを見よ！

【URL】

456：774の隊員

ん？ なになに……

457：774の隊員

え？

458：774の隊員

“全国生放送中”……？

459：774の隊員

え、待って

何言ってるのか分からないんだけど……

生放送……？

460：774の隊員

あ、カメラもある

461：774の隊員

記者も大勢いるなあ……

462：774の隊員

って、誰だよこのスレを繋げたの！

463：総司令



それは僕さ

464：774の隊員

え？ 総司令……？

465：774の隊員

ファツ!?

466：774の隊員

ちよ、待って!?

467：774の隊員

何やってんの総司令!?

468：774の隊員

我等がボスが率先して何やってるんだよ!?

469：774の隊員

ちよ、バレるバレる!

470：774の隊員

主に俺等の性癖が!

471：774の隊員

いやあああああああ!!??

見ないでえええええええ!!??

こんな私を見ないでえええええええ!!??

472：774の隊員

やばいやばいやばいやばい!?

これバレてもいいやつ!?

473：774の隊員

何やってんだよ総司令!?

474：総司令

テヘペロ☆

475：774の隊員

お茶目な仕草をしてとぼけるな!

476：774の隊員

鬼! 悪魔! 総司令!

477：774の隊員

悪魔! サゲイスト!

478：副指令

何やってるんだお前達は……

479：774の隊員

!?

480：774の隊員

こ、この絶妙に過労死寸前のイケメンは……!?

481：774の隊員

副指令!? 副指令じゃないか!?

482：774の隊員

どうやって(仕事から)脱出を!?

483：総司令

僕が引き摺ってきたのさ！

484：774の隊員

(仕事から逃げられて)ない(よう)です(ね)。もっとパワーを上げ  
ましょう)

485：774の隊員

追加文字が多すぎる | 114514点

486：774の隊員

ネタ飲に走どつてる場合かー!?

487：774の隊員

あばばば!?

488：774の隊員

あーもう滅茶苦茶だよ！

489：総司令

と、いうわけでだね

君たちの知恵を借りたいんだが……

490：774の隊員

何が「と、いうわけで」だ！

491：774の隊員

要件を話せよこんちくしょう！

492：774の隊員

あんたは有能なのかポンコツなのか問題児なのかはつきりしろ！

493：774の隊員

言葉が足りないのはあんたの妹の方でしょうに！

494：総司令

この鈍感君達！

そんなんだからいつまで経っても恋人ができないし、童貞を卒業できないんだぞ！

495：774の隊員

どどど童貞ちやうし!?

496：774の隊員

誰が童貞じゃ！

497：774の隊員

女性と話すことなんてしよっちゆうあるわ！（受付の子だけど）

498：774の隊員

つてか、アンタも童貞だろ！

499：774の隊員

やーいやーい！

知り合いのほとんどが結婚してる中、自分一人だけ独身貴族なのに、それを「まあ、僕は地味だからね」って言った後、一人で家に帰ったと思ったらベッドですすり泣いていて、翌日の模擬戦で調子を大きく崩した（無傷完勝）ことを皆に心配された滅茶苦茶派手な総司令！

500：774の隊員

子供の悪口すぎるぞ／＼499!?

501：総司令

お仕置が必要らしいね

502：774の隊員

ヒエツ……

503：774の隊員

ヒエツ……

504：774の隊員

ヒエツ……

505：774の隊員

ヒエツ……

506：774の隊員

ヒエツ……

507：774の隊員

ヒエツ……

508：774の隊員

画面越しに殺気を送らないでください

~~~~~

———それが、異能力者の掲示板ですか？

「ええ、そうですよ。流石に戦いつぱなしでは隊員の間で不満も出る

だろうから、娯楽を作ろうということと開発した掲示板機能です。異能力者として登録し、神祇省に所属しているのならどこでも使えるようになっています。それこそ海外であろうが、世界の裏側であろうが。魔術的なものなので皆さんのよく知る掲示板のように電波の届かない異世界でも、起点となるシステムや人物がいれば問題なく使えるであろうことは我々の検証で分かっていることです」

——は、はあ……。何となくは分かりました。そ、それで、柊木さんはどうしたのでしょうか？

「柊木は……ハア……柊木、そろそろ戻ってこい。記者と視聴者の前だぞ」

「木場、どいてくれ。こいつら殺せない」

「ネタに走るな。ハア……すみません皆さん。こんな総司令で」

——だ、大丈夫ですよ……それより、木場さんは大丈夫でしょうか……？

「俺ですか？ どこがそう思われてしまうような要素となってしまうたのでしょうか……？」

——い、いえ、非常に濃い隈ができておられるので……それに、先ほどからフラフラと……

「大丈夫ですよ。たかだか一月分の徹夜をしたぐらいなんで」

——い、一か月分!?

「そうですよ？ 何かおかしいところでも言いましたか？」

「いや、おかしいところしかないぞ木場。普通なら死んでるレベルだって……」

「馬鹿な……！ 一か月の徹夜が致死量だって……!？」

——普通はそうですよ！

「馬、鹿な……!?!? 俺が、今まで常識だと思っていたものは……!?!」

「木場……！ もう休め……！ 今からでもいい……すぐこの部屋を出てベッドに入るんだ……!?!」

「おのれえく……スレ民めえく……!?!」

——こ、今回は、この辺りで終わりにしましょうか……？

「ああ、頼む……!?!」

このあと、大衆の眼に異能という力を使う組織のトップとその補佐の姿がさらされたが、面白芸人としか思われなかった。

異世界への一歩

某月某日

本来なら見るはずのないであろう戦車が、キャタピラ音を鳴らし、東京の街中を通過していく。

それも一台だけではなく、「どこへ戦争をしに行くつもりだ？」と言いたくなるような量だ。

そんな戦車の軍勢に守られるようにして進む数台の装甲車。

その中では、こんな会話が繰り返り広げられていた。

「なあ……」

「どうかしたか……？ トイレは我慢しろ」

「違えよ！ ……今回の派遣ってさ総司令だけじゃなくて、表のお偉いさん方の意向も含まれてるんだろ？」

「そうだね。で、それがどうかしたの？」

一番最初に口を開いたのは、それなりに筋肉質であり、高校生の平均身長より少しだけ低い男。

彼は周りの者と比べると、非常に軽装と言える服装を身に纏っていた。

具体的に言うと、他の者達が作業服に装飾を追加したような衣服を着ているのに対し、その男は半袖で黒一色のジャケットに同色のカーゴパンツ。

そして、服によって覆われていないところは、黒いタイツのようなもので覆っていた。

そんな男は、頭上で腕を組みながら仲間達に疑問を投げかけていた。

そこには緊張感の欠片もなく、むしろつまらないと言わんばかりの雰囲気漂わせていた。

「なくんで、俺達も出る事になったのかなく、って思ってた。こんな

装甲車の中に押し込めて」

「……………あなた、聞いてなかったの?」

男が質問を投げかけると、それを聞いた対面に座っている女が頭を抱えながら聞いてくる。

それに対し、男は首を傾げながら口を開いた。

「? 何の話だ?」

「……………ハア……………」

男のアホとしか言いようがない言葉に、キョトンとした後、呆れたように非常に長いため息を吐く女。

何故なら、

「先ほど最終確認をしたでしょ? まさか聞いてないなんて言わないでしょうね?」

「最終……………確認……………」

「ハア……………」

男はそもそも話を聞いていなかったようだ。

何のことだか分からないと言わんばかりに、先ほど以上に首を傾げて反芻する男。

また、長いため息を吐く女。

「いいですか『城之内』? 我々は異世界へと向かっています。これぐらいなら分かっていますよね?」

「おう知ってるぞ。ってか、『皐月』。俺がそこまで馬鹿だと思ってるのか?」

「思ってるから言ってるんですよ!」

「どわあ!」

「ぐえっ!」

何故か自信満々に自分のことを馬鹿ではないと胸を張る男——
城之内和孝じよのうちにかずたかに、身を乗り出して怒声を上げる女——藤井皐月ふじいさつきは体を固定するために着けていたシートベルトを引き千切らんばかりにキレていた。

それを受けた城之内は驚いて、手足をばたつかせながら横に倒れ込む。

その所為で横に寝転がっていた男性の顔にのしかかっけてしまい、男性がカエルの潰れたような声を上げて立ち上がった。

その男性の身長は少し小柄な城之内より頭二つ分ほど高く、この場にいるメンバーでは二番目に身長の高い人物だ。

「なんだなんだ!? 敵襲か!?!」

「あつ、おはようございませす 春日〴〵さん。ぐつすりでしたね」

「…………おはようございませす春日さん。その馬鹿をとつちめていいですよ」

「おう！ おはよう臯月！ そしてやつぱりお前か城之内！」

「ギャー!?!」

起き上がった男性——春日紀仁かすがのりひとは、藤井の言葉を聞いてすぐさま城之内の頭へアイアンクロ—を食らわせる。

車内が騒がしくなつてきて所為で、もう一人眠つていた人物が目元を擦りながら、起き上がった。

その人物は、この場にいるメンバーと比較して一番背が低く、藤井と同じく女性である。

しかし、その少女の面影は紀仁とどこかに通つていた。

「うるさい…………静かにして…………」

「ぐ、ごめんよマイシスター！ 騒がしくしちゃつて！ ほら、お前も頭を下げる城之内…………!」

「ぐつ、す、すみませえん………… 花音〴〵さん…………」

「……………それでいい。じゃ、もう一度寝るから…………」

そう言つて横になつたかと思えば、十秒後には寝息を立て始める少女——春日花音かすがかのんの姿を見て、一同はほつと一息を吐く。

男連中が明らかに年下の女性（片方は兄妹関係）に頭を下げることの情けなさと言つたら…………

その様子を見て、またため息を吐いた藤井は耳元に手を当てた。
すると、彼等の脳内で声が響く。

（仕方ありません……………本当のところを言えば、すぐさま説教をしたいところ……………しかし、花音さんを怒らせてはいけないので 〴〵念話〴〵を使います）

(OK……流石に、ぶっ飛ばされたくねえからな。真面目に聞くよ……)

(了解……マイシスターの睡眠を邪魔したくはないからな(マイシスターの寝顔……最高です……))

(おい、この人余計なこと考えてるぞ)

(お前等……ちったあ真面目にしろ。あと五分程度で目的地に着くぞ)

((!!))

彼等が脳内で会話を開始すると、彼ら三人以外の声が脳内で響いた。

その声の主は、彼等の乗る装甲車を運転する男である。

装甲車のハンドルを握る男——山内竜司やまないりゅうじは、今年五十歳の初老の男性だ。

しかし、その体には衰えなど存在しないかのように、ハンドルを握る腕は丸太のように太い。

その姿は、まるで某コマンドーのように、「若い頃はドンパチやっていたのか?」と言われそうなほどマッチョだ。

目元にはサングラスを装着し、某親指を立てて溶鉱炉に沈むサイボーグのようにワイルドな服装で身を包んだ様は、一流の戦士のようにだった。

竜司が五分と言った瞬間、後部座席にいた全員が準備をし始める。

城之内は、座席の下に置いていた黒一色で染められたゴツイ見た目のアタツシケースを引っ張り出し、取っ手付近についていたボタンを押しこむ。

すると、そのアタツシケースは発光し、バラバラになったかと思えば、某アメモミの戦う社長が着るロボットスーツのように体のいたるところに装着されていく。

やがてできたのは、人体の急所と関節を守るように装着されたアーマーに、指先から肘までを覆う機械的なグローブであった。

だが、さっきのアタツシケースのどこにそんな容量があるんだと言わんばかりに、物理法則を無視したゴツイアーマーも追加で装着さ

れていく。

結果できたのは、どこぞのEDFの重戦士よりかは薄い装甲を纏った城之内が立っているという状況だ。

そんな城之内は、拳を握ったり開いたりして動作に不備がないか確かめていた。

藤井の方も同じように座席の下から取り出したアタツシユケースのボタンを押しこんで、変形させている。

できたのは、城之内と同じく急所と関節を守るように装着されたアーマー。

そして、城之内のようなグローブではなく、少し大きめのハンドガンに取り回ししやすいように改造されたサブマシンガンであった。

こっちは城之内とは違い、過剰と言ってもいいような装甲はなく、動きやすさにステータスを振った装備だった。

藤井も、銃を分解し、パーツに不備がないか確かめていく。

紀仁も先にアタツシユケースを起動した二人と同じように装備していた。

しかし、先の二人のように急所を守るところは変わってないが、関節を守るアーマーは最低限に減っていた。

そんな紀仁の装備は腰に提げられた四角い矢筒のようなもの。

だが、入ってるのは矢ではなく何本か剣の柄が見えた。

しかも、刀のような柄ではなく、西洋剣のようなものでもない。

紀仁は、そんな剣を矢筒から取り出し、状態を見ていく。

紀仁の持つ剣には鍔がなく、形容するなら長い投げナイフとも言うべきものだった。

一般人が見れば目を見開くような光景を作りだす城之内達。

何故、このような光景を作りだすことができるのか。

それには理由がある。

彼等は「異能力者」と呼ばれる者達だ。

詳しい説明は省くが、要は特殊な力が使える者達と思ってくれればいい。

本来なら、秘匿されるべき能力の行使を車内とはいえこんなに堂々

としているのは、最近、彼等の存在が世間に知れ渡ってしまったからだ。

こちらに関してでも省かせてもらう。

各々が、調子を確かめ終わったところで、竜司が提示した時間まで残り三分となった。

もう、目の前には異世界へつながる門ゲートが見えていた。

城之内達は、それぞれ装備を着込んだ状態で座席に着き、会話を再開し始める。

もちろん、口を動かさない「念話」というものだ。

（で、俺達は何をしに行くんだ？ 侵略してきた奴等の国を潰しに行く……なんてことはねえよな？）

（ええ。そんなことをしては相手と同じことをしているんですよ。そんなこと、戦争を禁止した我が国がするわけありません）

（だろうな。ま、一応聞いただけだよ）

（本題はそこじゃねえだろガキ共。時間が無い。藤井、話してやれ）
（分かりました）

城之内の推測を否定した藤井に、運転席の竜司が話を急かせる。

残り三分という時間で今回の出来事を話すには、少し時間が足りないと思っただからだ。

（我々の目標は、件の侵略の際に相手国に誘拐されてしまった人命の救出です。その際、様々な障害が発生するだろうことを見越して、我々異能力者が動くことになりました）

（ワイバーンとかゴブリンとかのファンタジーな生物と戦うんだろ？ それなら任せろ！）

（話を最後まで聞け坊主。事はそう簡単に終わらねえんだよ）

自信満々に拳を握ってやる気を見せる城之内を一喝する竜司。

そのまま、竜司が藤井の話を引き継いで話を続ける。

（相手の国がこの世界で言うところのどの時代に当たる生活基準なのか知って、その国から今回の件の賠償金を払わせる。その際、あわよくば同盟を組んで資源の貿易を行おうとしている……ってのが、お国の連中が考えているところだろう。だが……有識者達による情報交

換で分かったことから察するに、相手国の生活水準というか、論理感というのは中世ヨーロッパパレベルだろう)

(それって……どうということだ?)

(要するに、今の常識が通用しないということですよ。殺しはダメとか、戦争はダメとか)

(なるほど……)

竜司の説明によく分かっていたいなかった城之内が、藤井の説明で納得いったように左手の掌に右拳をあわせるという「理解した」の古典的な表現方法をする。

(それに言葉もよく分かっちゃいないからな。俺達異能力者は念話の応用で相手の言ってることが分かるが……今回の派遣はあくまで自衛隊さん方メインだ。それなりに時間はかかるだろうな)

(へへ)

(んで、今まで言ってきたのは、自衛隊さん方もやることだ。こっからは俺達がメインになる行動だ)

そう区切った竜司は、ドリンクホルダーに置いていたコーヒーに手を伸ばし、一口含んでから言葉が続ける。

(俺達がやるのは、この世界とお相手さんの世界を繋げた原因を突き止め、世界間の繋がりを断つ。もしくは、自由に開閉できるようにするってのがメインだ)

(え? それはどうということなんだ?)

今まで自分に用はないからと、妹の寝顔を楽しんでいた紀仁が疑問を投げかける。

それに対し竜司は肩を竦めながら言った。

(さあ? さすがの俺でもそこまでは分からん。俺達は命令されただけだ。聞きたいなら総司令にでも聞け)

(おっさんでも知らないのか……)

(それでも、情報はありがたいです)

(気にすんな。……つと、そろそろ見えてきたぞ)

そんな声が響くと同時に、全員の気が引き締まる。

まるでピリピリとした気配が車内に満ちて、眠っていた花音も起き

てくる。

「お兄ちゃん……時間なの？」

「おう、もうすぐ着くつてさ」

「ん、分かった。すぐに着替える」

そう言つて、他の皆に大きく遅れながらも、皆と同じようにアタツシユケースを取り出す花音。

発光したアタツシユケースは花音の体を包み込み、鈍く輝く装甲を作り出す。

しかし、出来上がった装甲は、大部分をコートのようなものに回しているからか、少し貧弱そうに見えた。

だが、それでもちやんと急所を守り、体の動きを阻害しないように設計されているようだ。

コートを構築した後、最後に残ったパーツが手に集まり、見るも凶悪なバズーカを構成する。

花音は、そのバズーカをトンファアのように構えて、ポーズを決める。

「むふ……」

「相変わらず、物騒な武器だな」

「なんだと!? 貴様、マイシスターの装備を馬鹿にするのか!？」

「黙ってください紀仁。大丈夫ですか花音？」

「大丈夫……たくさん寝たから……」

「そうですか……なら、期待してますよ? あなたの火力は凄まじいものですか」

「分かった……お兄ちゃん、うるさい」

「ぐはあっ!? そ、そんなあ……マ、マイシスターアア……」

「うっわ、スライムみたいになっていく……」

和気藹々とする車内。

これが今から戦場へと向かう者達の空気だろうか。

そんな時に、竜司から一喝が入る。

「お前等、騒ぐのもいいが目的地まであと三十秒だ」

「「!!」」

和気藹々とした空気を作りだしていた四名が、すぐさま自身の武器を手に取り、後部の扉から出られるように構える。

そこには、戦士の顔をした者達が立っていた。

気づけば、装甲車がいるのはドームの中。

車両の前方には先行している大量の戦車と、異世界が見える。

「……さて、お前等には言うておくべきことがある」

コーヒーを飲み干し、空になった缶を握りつぶした竜司は、臨戦態勢へと入った城之内達に告げる。

「命令は三つだ。死ぬな。死にそうになったら逃げろ。それで隠れる。運が良ければ不意を突いてぶっ殺せ。あ……これじゃ4つか。とりあえず死ぬな、それさえ守れば後は万事どうにでもなる」

「……それ、あのゲームのセリフですよな?」

「ああ、そうさ。俺みたいな男が言うた様になるだろ?」

「同感、つと……」

ドームの名かという長い一本道を通り、遂に異世界へとたどり着いた城之内達。

すぐさま、後部のドアを開いて指示されていた持ち場へと移動する。

一人残された竜司は、誰もいなくなったことでようやく吸えるようになった煙草をくわえ、指先から火を灯し、タバコに火をつける。

一度大きく吸い、肺を煙で充満させ、吐き出していく。

まだ夜明け前の空に、紫煙が昇っていく様を見ながら、竜司は独り言ちた。

「ハア……奴さんもどえらいもんに出したな。柊木が切れるなんて相当だぞ?」

その間にも朝日は上っていき、敵達を照らしていく。

そこには、異形の者達が大勢いた。

それを見て、自衛隊の者達も迎撃の構えを取っていく。

それを他人事のように見つめる竜司は、こちらへと向かってくる異形の者達に対し、心の中で念仏を唱えていた。

「この世界には魔法があるんだってなあ……それにファンタジーな生

物も」

頭上で腕を組み、これから始まる戦闘という名の蹂躪を頭の中で浮かべながら、言葉を続けていく竜司。

「だけどな……」

それは、思いのほか早く実現される。

「それはあんたらの専売特許じゃねえんだわ」

次の瞬間、

銃弾と魔法の雨霰が、異形の者達へと降り注いだ。

これが、日本の自衛隊と異能力者が異世界に来て、初の戦闘。

そして、波乱の始まりであった。

伊丹のお話

—— ねえ、伊丹。ちよつと異能力者になつてみない？

—— ……なんだ柊木。オカルトにハマったのか？

—— ノンノン！ これは素だよ伊丹。で、受けてくれるかい？

—— ……丁重に断らせてもらう。

—— ありやりや、フラれちやったなあ。

—— そもそもなんだ、異能力者つて。新しい同人サークルか？ それなら俺は入らないぞ。そういうのは梨紗にでも言ったらどうだ。

—— うーん……梨紗さんは多分できそうにないんだよなあ。僕が欲しいのは君みたいな強い人材なんだよ。

—— はあ？ 力仕事でもさせるのか？ なら断らせてもらう。俺の座右の銘は「食う寝る遊ぶ、その合間にほんのちよつとの人生」だからな。仕事に関しては断らせてもらう。

—— うーん……結構好待遇なんだけどなあ。

—— ……具体的には？

—— 週休二日の有給あり。給料もそこそこいい。漫画もアニメも読み放題。

—— よし受け

—— ただし命を懸けてもらう必要がある。

—— 断らせてもらう。

—— うーん、ダメかあ……

—— つか、命を懸けるって、どんな危ないことをさせるつもりなんだよ。

—— ン？ 特殊能力を使って悪党を捕まえたり、魔物を討伐する危険な職だよ？

—— なおさら無理だな。俺はただの一般人ですよ。

—— えー入ってくれよ伊丹。友達のよしみでさ。

—— それより、冗談はやめろよ。今時厨二病を脱却できていないと

か恥ずかしいぞ？

——だから言ってるじゃないか。これは本当のことだって。

——じゃあ、証拠を見せてみるよ。見せてくれたなら受けるかはともかく、信用はしてやる。

——お、言ったね？ これを見て度肝を抜かれるなよ？

——は？ お前なにを

——『宇宙という設計図スケールを構想、それを基に空間構築、構築した領域を拡散、魔導炉心解凍、魔術式稼働』

——おい、ちよ

——『稼働率3%を突破、魔術結界構築に必要な魔力充填完了、術式発動対象を僕と伊丹に限定』

——何し……として……お前

——『魔術式発動』

——な……

——『——』

——……嘘……だろ……。

——ふう……これで信じてくれるかな伊丹？

——床が……!?! 天井が……!?!

——これが異能の力だよ。と言っても、僕が規格外だからこんな“世界”を創りだせるんだけどね。

——これは夢だよな？ 俺、寝ぼけてるんだよな？

——夢じゃないよ伊丹。これは現実……から切り離すようにして創った新しい“世界”だよ。

——……

——で、入ってくれるかい？ 伊丹？

——……

——もしもーし！ どうしたの伊丹？

——……

——聞いているのかい？ いた……!?!

——……

——し……死んでる……!?!

……
——い、伊丹——！ カムバアック！

とある焼き肉店での出来事

~~~~~

ここは、「特地」と呼ばれる異世界。

排気ガスなどの余計なものがないからか、異世界の空は驚く程に透き通っている。

そんな空の下、世界観に似合わないような車両が、数台の群れを成し、どこかへ向かっていた。

その内の一台ではこんな会話が繰り返り広げられている。

「そう言えば、伊丹隊長って異能力者達の組織、えーつと……」

「神祇省か？」

「そうそう、その神祇省っていう組織の総司令である柊木真さんでしたっけ？ と友達なんすよね？」

「ああ、そうだが。それがどうかしたか？」

運転席に座る男——倉田三等陸曹が助手席に座る男——伊丹耀司いたみ しょうじに質問をする。

それに対し、伊丹は景色を眺めつつ答えていく。

「どんな人何すかね？ 一応テレビとあの宣言の時……あと模擬戦の記録映像でしか見たことは無いんですけど、友人から見てみればどんな人だったのかなあ……って思いました……」

そう、頬をかきながら質問する倉田の眼には好奇の色が見えていた。

そんな目を向けられている伊丹は何とも言えないような表情で話し始める。

「まあ……簡単に言えば、完璧超人。悪く言えば、理不尽の権化、だな」  
「……な、なんすか、その反応に困るような言葉は……」

「そのまんまだよ。アイツはガキの頃から何でもできた」

そう話す伊丹は、過去のことを思い返すように遠い目をする。

「アイツは小学生の時から何でもできた。勉強や運動、工作に料理。更には部活でしか学ばないような技術も覚えていた」

「ぐ、具体的には……？」

「……空手、柔道などの武術全般。野球やサッカーなどの球技全般。陸上だってできた。他にもダンス、書道、絵描き、機械操作等々……あいつのできないことを探す方が難しいんじゃないのか？ 大会に出れば必ず一番、チーム戦の時なんか、敵チームがアイツを徹底マークするほどだったからな。家庭科の時なんて、アレンジにアレンジを重ねて一流シェフレベルの料理を作っちまって、先生の腰を抜かせてたんだよ」

「そんなにですか!？」

伊丹が語っていく柊木の凄まじさに、驚いたような声を上げる倉田。

その際、車が大きく揺れてしまうが些細な問題だ。

「そ、そこまでやれる人が、今は異能力者のトップつすか……」

「ま、あいつはガキの頃から不思議なやつで、暇な時があれば、いつも歴史書とかみたいな難しい本を読んでいるような奴だよ。俺達がマンガの話で盛り上がっている横で、アイツはただひたすらに知識を集めていた。それこそ、先生に怒られるギリギリまでな」

「へえ……」

もう驚きすぎてただ車を運転するだけの機械と化した倉田が呆けたような声を出す。

それほどまでに、柊木のやってきたことは凄まじいのだ。

だがこれで終わらない。

「今まで話したのは、小学生と中学生時代までの話だ。義務教育じゃなくなったアイツは更にヤバくなっていく」

「ま、まさか……!?! 不良に……!?!」

非行の道へと進んだのかと生唾を飲み込む倉田。

「いや、三年間ずっと生徒会長になり続けた」

「優等生の極み!」

が、予想とは違い、むしろ正反対の道を歩み始めた柊木の行動に、思わずハンドルへと頭をぶつける。

「アイツのおかげで、学校側の環境がよくなりすぎてさ。〇〇高校って知ってるだろ? あれが俺等の母校」

「超有名校じゃないですか!?! え!?! 一生徒がそこまで変えたんつか!?!」

「元は普通の高校だったんだけどなあ……アイツが一年生でありながら生徒会長に選ばれた時は、「なにがあつた!?!」って思ったよ。まあ、俺には関係ないって切り替えたんだけどな。その日から学校の環境が変わるわ変わるわ。退屈とは無縁の高校生活だったけど、面倒ではあつたな」

「ええ……」

ちよつと引き気味の倉田を尻目に、少し楽しそうに話していく伊丹。

「町内行事には真っ先に参加し、同級生の子には勉強を教えていた。いじめっ子もいじめられっ子も手を取り合って学校に登校し、先生方もいい人だと思えるような人ばかりだった」

「え? 先生にも何かあつたんすか?」

「もちろん。アイツが授業の仕方を教えたり、新人の先生にはこうすればいいんだってのを教えに行っていた」

「生徒っすよね? その時の柊木さん。まかり間違っても派遣された超エリートな新人教師じゃないんですよね?」

伝説を作り過ぎて、もはや、映画の二、三本は出来そうな出来事の数々に疑い始めてしまう倉田。

「そんな柊木だがな、将来の夢は一貫して変わらなかつたんだよ」  
「気になるんですけど……聞いてもいいっすか?」

そんな倉田の反応に、自身ではないが友人を自慢するように言葉を続けた。

「『誰かの上に立ち、そして引つ張っていけるようなそんな人間になりたい』ってさ」

「……まんま今の柊木さんの立ち位置になってますね……」

「だろ？ アイツが自分のことを異能力者だとぼらした時はビツクリしたぜ？ なんせ、組織の頂点に立っていて、有言実行してたんだから」

そう笑顔で語っていく伊丹。

しかし、次第に笑顔が消えたかと思えば、心底疲れたような顔になっっていく。

「だ、大丈夫ですか？ 伊丹隊長？」

「ああ、大丈夫だ。めっちゃ疲れてるだけでな……」

「確か……伊丹隊長って、めっちゃ取材されたんですよね？ 柊木さんのことも色々……」

そう言う倉田はある事を思い出す。

自分達がここに派遣される理由となった出来事を。

『銀座事件』の時に、伊丹隊長も人命救助に動いたんっすから、ここまで有名になるのも仕方ないんじゃないんっすかねえ」

「俺は有名になりたくなかったんだけど……柊木のことだけじゃねえ。俺のことも根掘り葉掘り聞かれたし……ハア……本人いるから直接聞けよ。友人としてどう見たのかって聞かれてもよお……ただスゲエ奴だとしか見てなかったよ……」

ため息交じりに愚痴を吐いていく伊丹。

「しかも、アイツが異能力者ってことをばらした時、異能のことを疑っていた俺に向かって能力を使ったんだよ」

「？ どんな能力っすか？」

疑問に思う倉田に、伊丹は衝撃の事実を告げる。

「型的に言えば『固有結界』。呪術廻戦的に言えば『領域展開』。アイツが言うには『魔術結界』だっけか？ を焼肉屋の個室で発動した」

「ちよ!? 『固有結界』とか『領域展開』って、高難易度の技じゃないっすか!? そんなのを焼肉屋の個室で!？」

「前見ろ倉田」

「あ、す、すいません……」

道を逸れかけていた倉田を制し、伊丹は続ける。

「アイツにとつては、それぐらいの魔術は簡単らしい。むしろ、永久機関を作りだす方が難しいって言ってたな」

「永久機関も作りだせるんっすか!？」

「できるそうだ。……って言うか、模擬戦の映像で発動してたって言ってたぞ? 聞いてないのか?」

「あ、いや、その時はアニメみたいな撮影技術と映像に気を取られて、詳しいところは……」

話に出てきた模擬戦の映像とは、柊木や異能力者の中でも幹部に値する者達の議論の末、「自分達を戦力の一つに数えてもらうのなら、具体的な戦力は提示しておかなければ、後々面倒なことになる」ということが決まり、過去に柊木対「特級」の面々で模擬戦を行った際に記録した映像を公開することにしたのだ。

ちなみに「特級」とは、異能力者の階級を示すものの最高位を表すもので、その戦力は、たった一人で軍勢と戦えるという規格外なものである。

残念ながら、大勢の特級が相手であっても、柊木には傷一つつけることができなかったのだが……

その際の映像は、今回の自衛隊メンバー全員が見ているし、某有名な動画配信サイトなどでも公開されている。

あまりの戦闘の熾烈さに、某動画サイトでは赤文字で画面が埋まるという事態が発生し、ある掲示板ではあまりの書き込みの多さに、サーバーが落ちるなどといった事態も発生した。

ちなみに、その動画サイトでは柊木が出ると、必ずと言っていいほど赤文字で画面が埋まり、更には「日本が核を持たない理由」「ラスボス」「最強」「無理ゲー」「死ぬがよい」「生まれる世界を間違えた」「負ける気がしない」「勝てる気がしない」「BLACK RX」「お前ら人間じゃねえ!」等々そうそうたるタグがつけられるのがお決まりになった。



「ま、柊木はそんだけすごいんだぞってことを覚えておけばいいさ」「いや、すごすぎて実感がわかなくなってきたんですが……」

そんな会話が続きながらも、彼等は進んでいく。

このあと、ドラゴンを目撃し、現地民を一人保護することになるのは、今の彼等に走る由もなかった。

## 集う者達

年の頃は十四五歳といった感じで貫頭衣を纏ったプラチナブロンドの少女——レレイ・ラ・レレーナは賢者である。

そんな彼女はここ最近出会った緑の人達——“ジエイタイ”の成すことに興味津々であった。

彼女は賢者と呼ばれるように、その知識は深く、そして彼女自身も非常に聡明だ。

そんな彼女をして、ジエイタイと呼ばれる者達は非常に興味深かった。

独りでに走る鉄の馬車に“ジュウ”と呼ばれる魔法の杖。

これだけでも興味を引かれるのに、それ以上のものがあつた。

「あなた達は何者？」

「あん？ どうした嬢ちゃん？ いきなりそんなことを聞いて……」

それが“異能力者”。

同じ人とは思えないような身体能力を持ち、それぞれが並の魔法では到底かなわないであろう強さの“異能”というものを行使する。

そして、ジエイタイの者達と違い、普通に話せるということだ。

だからこそ、ジエイタイのような緑の服を着た者ではなく、独りでに走る馬車の傍に立っていた大男に話しかけたのである。

「私はあなた達のことを知りたい。どこから来て、なにをしに来たのかを」

「……生憎のところ、全部は話せねえ。が、俺が話せる範囲でならいぞ」

「分かった。まずは……」

そうして、レレイと大男——山内竜司は話始めた。

「なぜあなた達異能力者とジエイタイの者達は会話が可能なのか？」

まず最初に気になったのは、会話が成立するかどうかについてだった。

これに関しては、納得のできる質問だろう。

何故なら、仲間であろう異能力者とジエイタイの者達では会話が通じている。

これは当たり前だ。

何故なら同じ国に生まれたのだから会話が通じるのは当たり前のことである。

だが何故、異能力者とレイは会話が通じるのに、その異能力者の仲間であるジエイタイの者達はカタコトでしか喋れていない。

ジエイタイの者達は、訓練の積まれた兵士だということが分かる。それなのに、同じ仲間であるはずの異能力者達は流暢に喋れているのに、ジエイタイの者達はカタコトなのか？

「あく……固有の名前とか馬鹿みてえな言葉が出てくるが、それでもいいか？」

「問題ない」

「なら話すぞ？ 俺達異能力者と自衛隊の皆さん方はこことは違う世界——地球っていうところから来たのさ」

「なるほど……」

顎に手を当てて考え込むレイ。

確かに、それならば全ての理解は出来ずとも納得はできる。

世界間の違いがあるのなら、自分達の言葉が通じないのも分かった。

では何故、異能力者達は自分達と会話ができるのか。

「異能力者ってのはな、頭で考えるだけで会話ができるんだよ」

「念話のようなもの？」

「それがどういうもんかは知らねえが、おそらくその認識であっているはずだ。俺達は戦場に出る。そんな時に相手に聞こえるように声を出したら、作戦も何もかも崩れちまう。だからこそ、俺達は頭の中で会話をすることができるようになったのさ」

「でも、それでは私達と会話ができていない理由にはならない」

レイの言う通り、頭の中で会話ができればからと言って世界すら違う者達が会話できるはずがない。

「良いところに気付いたな。その通り、頭の中で会話ができるからと

言ってお前さんらと話ができるとは限らない。俺達の世界には国が大量にあつて、それぞれ扱う言語も違う。それなのに俺達の国の言葉で話したら相手にはなんのこっちゃん分らない。だからこそ、俺達の会話は「意思」で通じているのさ」

「意思……」

「ま、簡単に言えば、あそこにいる馬は馬だ。それを表す言語が違うだけで、示しているものは同じ。なら、言葉に乗せられている「意思」を魔術的なもので汲み取り、分かりやすい言葉にする。そういうので俺達は会話しているのさ」

「なるほど」

例えを入れることで、分かりやすく解説してくれる竜司。

思わず感心するレレイ。

続いて質問する。

「異能力者とは何？」

「異能力者ってのはな、ただの人間に特殊なものを埋め込むことで肉体を強化された人種のことだ。その際、体にある魔術を生み出す器官が刺激され、魔術……こっちゃんや魔法だっけか？ を使えるようになる。その際、さっきの言語を理解する能力も得る」

「魔法なのに異能？」

「ああ、俺達がいた世界は広くてな。その国によって魔法の呼び方が違ったんだよ。さっきの馬みたいにな。それで、いちいちそれぞれの呼び方をしていたら混乱するだろうということで、統合した呼び名——「異能」という呼び名になったんだ。んで、「異能」という「力」を使える「者」で、「異能力者」って呼ばれるようになったんだよ」

「なるほど」

要するに、リンゴをappleと呼んだりしてこんがらがらるから、一つの呼び名に統合しようということらしい。

「あなたの異能は？」

「俺の異能か？ 俺の異能は「スモークキング煙吐きの重機関車」だ。俺達の国には機関車っていう乗り物がある。それになぞられたやつだ」

「どんな力？」

「ただ単純なパワー増大の異能。ただ力が強すぎてな。異能を発動したまんまじゃ鉄板を紙みてえに破いちまう」

そう言うのと、竜司は懐から知恵の輪を取り出す。

「こいつは知恵の輪って言うてな、上手いことやらねえと外れないっていう玩具だ。<sup>オモチャ</sup> ついでに言えば、金属でできているから無理やり解くことは普通出来ない。試しにちよつと解いてみる」

「分かった」

そう言つて渡された知恵の輪を解いていくレレイ。

レレイが挑戦して外すのに、一分とかからなかった。

外された知恵の輪を渡され、答えを知っていた竜司はあつという間に元通りにしてしまう。

「……せつかく外したのに」

「ははは！ すまねえな。ま、遊ばせてもらっただけよかつたと思え。んじゃ、俺の能力はな……っ！」

竜司が、深呼吸をして調子を整えた瞬間、パキンツという音を立てて知恵の輪が簡単にちぎれてしまった。

「つと、こんな感じに結構な力が出せるのさ。やろうと思えば、炎龍とやらと力比べができるかもな。……つてかアイツ等、もうちよつと頑丈なやつ寄越せつて言つてんのによ……」

「それはすごい」

レレイは、苦も無く金属の輪を引き千切ってしまった竜司を称賛する。

最後の方にボソツと言つたことは無視をする。

『おっさん。そろそろ時間だ。車を出してくれ』

「あいよ。つと、すまねえな嬢ちゃん。話し込んじゃった」

「大丈夫。興味深い話が聞けたから」

「そうか……んじゃ、怪我せずついて来いよ」

ジエイタイの一人が竜司に出発することを告げたらしく、竜司は鉄の馬車に戻っていった。

レレイも自身の馬車に戻っていく。

こうして、賢者と重機関車の秘密の話し合いは終わった。

## 番外編 柊木達の模擬戦

ここは、とある平原。

起伏もなく、周囲に風を遮る障害物など有るわけがない。

点々と浮かぶ小さい雲が見えるただひたすらに青い空の下、短く生えた草が風に揺られて波を作りだしている。

しかし、そんな現象が起きていたとしても、この場所は些か殺風景すぎた。

実はこの世界は地球のどこかにある場所ではない。

これは魔術的なものによって作られた人工的な世界なのだ。

そんな場所に、数十人の男女がいた。

彼等を目に見える範囲で判断するなら、各々が様々な国から来たのである。それを表すように、それぞれ特徴的な服を身に纏っている。

作業服を身に纏う者、シスター服を身に纏う者、甲冑を身に纏う者……等々。

一見、コスプレ会場か？ と疑ってしまうような者達がいるさまはどこか周囲の環境も合わせて浮いていた。

世界に存在する国から一人一人ランダムに選ばれたのかと言える彼等は、思想もバラバラであろうことがうかがえる。

しかし、

「皆ごめんね。今回付き合わせちゃって」

それは平常時ならばの話だ。

彼等がそろって見つめる先には、一人の男——ひいらぎまこと柊木真が立っていた。

魔術師のようなフード付きコートに、黒い杖を突いた柊木が、まるで世間話をするかのように話しかけてくる。

そこには緊張感の欠片もなく、ただの会話だと思っただろう。気配が感じられた。

柊木を除いた全員がそんなことを思ってられないほど柊木を警戒しているのに……。

そんな時、その場全てに響くような声が聞こえた。

『兄さん。聞こえてますか？』

「うくん……大丈夫だよ。結<sup>ゆい</sup>。ちゃんと聞こえてる」

『分かりました。皆様の準備はよろしいでしょうか？』

そんな声が響く中、その声の主と会話をしていく柊木。

やはりそこには緊張感の欠片もなく、ただ親しいものとの会話だけがこの場に響く。

そもそも何故、彼等がこんな場所にいるのか？

それは、ある事を行うためなのは今更言わなくても分かるであろう。

「みんなの方も大丈夫そうだし始めようか」

彼等は戦いに来たのだ。

柊木真対その他全員で。

『それでは、審判を務めます、柊木真の妹、柊木結<sup>ひいらぎゆい</sup>です。それでは各自、戦闘準備を整えてください』

虚空から聞こえる声の主は、どうやら柊木の妹のようだ。

そんな彼女の声が響くと同時に、全員が構える。

ピリピリとした殺気が漏れ出し、場の緊張感を高めていった。

自身が持つ武器を抜き放つ者もいれば、周囲に魔法陣を浮かび上がらせる者もいる。

明らかな戦闘態勢だ。

しかし、

「ふんふん♪」

それでも柊木は鼻歌を歌いながら杖を回して戦闘態勢など摂っていないように見える。

『カウントダウンを始めます。10…9…8…7…6…』

そんなことを思ってる間にも、結がカウントダウンを始める。

『4…』

これより始まるのは、世紀の大決戦。



その一部始終。

『3…2…』

神話ともいえる伝説が、

『1…』

今、始まる。

『0』

瞬間、世界が赤く染まった。

何が起こったか。

それは、先ほどまで何の構えもとつていなかった柀木が、目にも止まらぬ速さで杖を向けたかと思えば、その杖の先から膨大な熱量の光線が放たれたのだ。

その威力は今起こっている状態が物語っている。

平原を覆っていた草は一瞬にして燃え上がり、その光線のあまりの明るさに、周囲が夕焼けのように暗くなっていた。

時間にしてわずか五秒と経たずに引き起こされた災害にさらされた者達は、しかし、

「ジャアッ!!」

諦めてなどいなかった。

攻撃にさらされた先にいたであろう一人が、いつの間にも移動していたのか音速を軽く突破するような速度で横から急接近してくる。

その人物は蒼い光を纏い、殴り掛かってきていた。

このままでは無防備に受けることになってしまおうであろう柀木は、杖を構えたまま棒立ちしている。

それは何故か。

答えは簡単だ。

光を纏った人物の速度が速すぎるからである。

例えるなら、音速を超えて飛翔する弾丸。

例えるなら、軍隊が使用する戦闘機。

例えるなら、我々を見下ろす宇宙を高速で翔る流星。

残光を残しながら疾走する様は、まさしく流星のようであった。  
が、

「さすが！ 世界最速の名は伊達じゃないね彼方君！」

「そんな俺の速度に追い付くアンタの方もおかしいがな！」

「割とギリギリだったよ？ 彼方君ってすごく速いからさ」

空いていた腕を向けられ、そこから展開された複数の魔法陣によって簡単に受け止められてしまう。

それでも、展開されていた魔法陣の何枚かは破壊され、粉々になっていた。

そこから察するに、先ほどの拳は絶大な威力を秘めていたのだろう。

実際、拳が直撃した反動で、地面が少しめくれあがっていた。

しばらく、金属の擦れ合うような音を響かせながら拮抗していたが、蒼い人物が引いたことでいったんは終わる。

しかし、すぐさま加速した青い人物——彼方はまたも急接近して、今度は連撃を加えていく。

先程の一撃を重視したような攻撃ではなく、手数考えたラッシュを叩きこんでいった。

ガラスの割れるような音を立てて魔法陣が砕かれていくが、すぐさま新しい魔法陣が展開されて拮抗状態は変わらない。

「おお！ 更に速くなつていくのか！ 君に限界はないねえ！」

「だったら一発くらいは食らってくれねえかな！」

「そうしたら負けちゃうじゃん。というか、一発はいつも食らってるでしょ？」

「防御完璧でノーダメージなのを食らったとは言わねえんだよ！」

そういうやり取りをしながらも、状態は変わらない。

むしろ、魔法陣の生み出される速度が上がってきているからか、彼の方が不利になっていく。

そんな状態であろうとも、彼方は不敵に笑う。

そして、愚痴を吐きながらラツシユをしていた彼方はある事を言う。

「なあ、なんで俺がこんなぺらぺら話しているか分かるか？」

「もつちろん！ 君がこんなに話すとしたら——」

分かったように言葉を続けようとした柊木に影が差す。

「時間稼ぎ以外の何物でもないよね！」

「ごめんね柊木ちゃん！」

そこにいたのは巨大な戦鎚を振りかぶっている女性だった。

瞬間、大爆発が起きる。

先程の彼方が引き起こした衝撃による被害程度ではない。

まさしく膨大な爆薬が瞬間的に爆発したかのように地面は隆起し、岩盤がめくれ上がった。

土が雲を突くほどに舞い上がり、傍目から見ればそこから瞬時に山が生えてきたかのようにだと感じられた。

地中であつたであろう岩石が大地に降り注ぎ甚大な被害をもたらすが、周囲に建物など有るわけがなくなつただ大きな音を立てるばかりである。

先ほどまで放たれていた熱線も、柊木が土煙に隠れてしまった瞬間から途切れている。

そんな爆心地とも言うべき場所から少し離れた場所に彼方と戦鎚を担いだ女性が降り立つ。

「手応えはどうつすか 『藤原』 先輩！」

「ううくん！ ダメだと思っ！」

「ですよね！ 知ってました！」

「もうちよつと期待してくれてもいいのにな〜！」

そう状況を確認する彼方と戦鎚を担いだ女性——藤原は、警戒心を緩めることなく爆心地を見据えた。

今もなお、もうもうと煙の上がる爆心地から誰かが出て来る。

「いや、さっきのは結構危なかったね。まさか転移術式を使って上空に転移させての、そこから落下による加速の乗った一撃を藤原君に決めてもらうなんてね！」

そこにいたのは、無傷の柊木だった。

着ている服には一切のほつれが見当たらず、先ほどの攻撃は回避されてしまったことが分かる。

相手の強大さに思わず息を呑む二人。

戦いは始まったばかりだ。

~~~~~

さて、いきなりの連続に理解が追い付いていない者達もいるだろう。

そんな者達の為に解説だ。

そもそも彼等は普通の人間ではない。

彼等は「異能力者」と呼ばれる者達なのだ。

詳細は省くが、分かりやすく言うなら「魔法などが使えるようになるための改造手術を受けた超人達」といえば分かりやすいだろう。

そんな彼等は、常人離れした力を持っている。

柊木が最初に撃った熱線に攻撃を受け止める魔法陣のようなもの。

彼方の音速を越えた移動速度に、藤原の戦鎚を振り回せるほどの凄まじい筋力等々……。

そのように常人じゃできないであろうことを成せるのが「異能力者」というのだ。

彼等は、フィクションであるような力を使うが、それらの中の一部のように異能という力を自由に使っているというわけではない。

それは何故か？ 理由は簡単だ。

彼等は国に属する軍隊なのである。

そんな彼等が異能を無暗に使ってしまったてはいけないのは当たり前のこと。

そして、異能というものは武器なのだ。

それもそこらのオモチャ以上に殺傷能力のあり、機械なんかでは探ることのできない武装解除も出来ないそんなもの。

それを行使するのは、武器を振り回すことと同意義だ。

もつとわかりやすく言おう。

同じ銃を持つ者でも、警察と犯罪者では訳が違うといえれば分かりやすいか？

彼等は異能という超常の力を行使する存在であり、とある存在や異能を悪用する犯罪者と戦う兵士でもあるのだ。

警察が町中で発砲してはいけないように、異能力者も緊急時以外は異能を使つてはならない決まりとなっている。

さらに言うなら、異能の力を秘匿しておきたいからという理由もある。

異能の力は前述したように非常に強力だ。

そんなものをテロリストが手に入れてしまったと考えるみよう。

答えは簡単。

そこから死人が出る地獄へと、いつ変わるのか分からない恐怖の世界が出来上がる。

だからこそ、異能力者達は異能のことを秘匿し続けるのだ。

世界を、人々を守るために。

前置きはさておき、本題に入ろう。

何故、彼等が戦っているのかについてだ。

異能力者とは兵隊である。

日本の分かりやすい戦力という意味では自衛隊というものが存在する。

そんな彼等と同じようなものであるならば、非常時には戦闘を行

い、負傷者を助けるといったことをしななければならない。

自衛隊の者達も他とは一線を画すような訓練を行っているが、異能力者達はその比ではない。

——ところで、君達は山のように巨大な竜と戦うことになったらどうする？

相手は強大で、歩みを進めるだけでも地震が起きる。

攻撃をしようにもまるで痒みすら感じていないかのように歩みを進める竜。

立ち向かおうものなら、たちまちその巨体で踏みつぶされてしまう。

そんな存在に遭遇してしまつたら、普通は逃げるべきだ。

——だが、その先に守るべき存在があるとしたら？

ならば、命を賭して戦わなければならないだろう。

こういうのは異能力者の間でも稀なケースだが、それでも異能力者として生きているのならば様々な困難が誰にでも訪れるはずだ。

だから、異能力者はそれらをはねのけるために事故を研鑽する。

それが、彼等のやっている「模擬戦」。

それも、数多くいる異能力者の中でも上澄みである「特級」と呼ばれる者達と、「最強」と呼ばれる男たった一人のハンデ戦^戦なのだ。

——「特級」

それは、異能力者の中でも最高位に位置する者達しか与えられない栄光。

ある者は人望から。

ある者はその速さから。

ある者は傷を治すという能力を持っていたことから。

ある者は山のように大きい竜を沈めたことから。
ある者は伝説の後継者であることから。
ある者は人類の歴史を大きく発展させるほどのものを作りだした
ことから。

——ある者はその圧倒的な強さから。

様々な理由で選ばれるが、個人個人が常識を超えた実力を持って
いることから、“特級”の者達を総じてこう呼ぶ。

——「異能力者の最高戦力」と。

そんな彼等も日頃の研鑽は怠らない。

最速と呼ばれた者は、遠方へ自身の足を用いた物資の運搬を行い、
傷を癒せる者は積極的に負傷者の治療を行いつつもその現場の緊迫
さへ慣れる。

だが、戦闘に特化した者達はこれらができないのだ。

だからこそ、そんな者達の為にこうした模擬戦を開催したりするの
である。

これで解説はいったん終わりだ。

~~~~~

「痛たたた……おととと……危ない危ない……」

「だあつ、くつそ！ ひよいひよい避けんな！」

現在の状況を見よう。

未だ、柊木と彼方の攻防は続いており、彼方の怒濤の連撃を柊木が  
紙一重で避けていた。

縦横無尽に駆けまわり、周囲から空気の壁を突き破るほどの速度で

攻撃を仕掛けてくる。

もはや、速すぎて見えているのは残像だけかもしれない。そう思ってしまうほどに、彼方は速かった。

しかし、そんな攻撃を回避している柊木は大分余裕そうで、反対に彼方は息が上がっている。

実はあれから一分ほど時間が経っているが、彼方は一撃もクリーンヒットさせることができず、そして余裕そうな柊木に苛立っていた。無理もない。

柊木は口では焦っている風に言っているが、実際はギリギリに避けていることを楽しんでいるようにすら感じられるからだ。

息が上がっているとはいえ、その技のキレは落ちておらず、むしろキレが増しているとすら思える彼方の攻撃は、例えるとするならばや“雨”である。

絶え間なく降り注ぎ、地面を濡らす雨。

それほどの攻撃をしているのに、相手は余裕どころか舐めているように感じられる。

ちよつとキレてもいいだろうに、そこは彼の人柄か。

自身が未熟だと思い、後から鍛え直そうと考えていた。

そんな時、横合いから攻撃が飛んでくる。

ドドドツという音と共に、無数の弾丸が飛んできたのだ。

「じゃあな柊木さん！ 穴だらけになるなよ！」

攻撃が来るのを事前に察知していたかのように、彼方はすぐさま撤退して攻撃の射線に入らないようにする。

遮蔽物がなくなった弾丸は、柊木へに向かって直進していった。

このままでは、柊木が出来の悪い穴あきチーズのようになってしまおうだろう。

しかし、その程度でやられてしまうのなら、誰も彼を“最強”と呼びはしないだろう。

「良い攻撃だー！」

弾丸を放ってきた元凶に向かって、賞賛を送りながら杖を振るい弾丸を叩き落としていく柊木。



木製であるはずの杖は、柊木の膨大な魔力によつて鋼鉄すら凌駕する硬度を持っていた。

そんな杖によつて難なく弾き落とされていく弾丸の群れ。

しかし、杖一本だけでは弾ききれない弾丸もあったが、それは先ほどこから防御に使つていた魔法陣を的確に移動させることで防ぎきる。

明らかに人間離れをした動きをしている柊木だが、彼をよく知る者達や、現在柊木と相対している者達が見たなら、「まあ、柊木だし」というだろう。

「フツハハハハハハハハハ!!」

柊木が弾丸を叩き落としていく最中、弾丸の飛んでくる方向から高笑いが聞こえてくる。

そこにいたのは、メカメカしい服と武器を装備をした初老の男性だった。

そのメカメカしい装備のほとんどは銃で、どここのコマンドーだと言いたくなるような有様だったが、科学者のような白衣を着ているため、どちらかというマッドサイエンティストというべき姿だった。

そんな男性は、どこからともなく飛んでくる弾丸を防ぎ続けている柊木の姿を見て思いつき破顔したかと思うと、声高々に口を開く。

「フツハハハハハハハハハ!! どうだ柊木!? お前の障壁と身体強化による硬質化した肉体を粉碎するために開発した特製の徹甲弾、その改良版だ! 存分に味わえ!!」

「なんてもんを作りだしてるんだよ北見<sup>きたみ</sup>い!」

その男性——北見はそう言った直後、自身が身に纏つていた武装を抜き放ち、これまた柊木を襲つている弾丸のように雨霰と乱射する。弾切れなど存在しないかのように無尽蔵に放たれる弾丸は、雨なんて生易しいものではない。

だが、そこに狙いを定めるなど考えておらず、ただばら撒いているだけだった。

しかし、それが脅威である。

「!? マズいねえ!」

自身が振るっている杖を見た柊木が焦りの声を上げる。

何故ならば、その杖がボロボロになっていたからだ。

先に言った通り、柊木が膨大な魔力を込めたことで杖の強度は鋼鉄を凌駕している。

それなのに、杖には傷が入るところか損傷し始めていた。

このままだと、後数十発で杖は押し折れてしまうだろう。

それはマズいと思った柊木は、弾丸を魔法陣に任せて、足元にまた魔法陣を浮かび上がらせる。

「ぬ!?! 逃げる気か!?!」

北見の発言から察するにおそらく転移する術式。

撤退されてはマズいとさらに濃密になっていく弾丸の雨。

その弾丸は確かに障壁を割っていくが、一枚で駄目ならと複数の障壁で防いでいく。

普通の異能力者なら、数十枚の障壁を展開するだけで魔力切れになるが、柊木は一向にその気配が見られない。

やがて魔力が高まり、魔法陣は起動してその場から柊木の姿が掻き消えた。

柊木が現れたのは、そこから少し離れた場所。

最初に藤原が放った一撃により地面が隆起したからか、平原だったそこには高低差のある地形が発生した。

その陰で腰を下ろし、一息つく柊木。

「ふう……危な——」

「シィッ!!」

「——いねえ!?!」

だが、目の前に突然現れた男が殴り掛かってきたことで一時の休憩は中断される。

現れた男の攻撃によって、先ほどまで柊木が座り込んでいた場所は粉々に砕かれた。

「……外したか……」

「あつぶないなあ!?! あの時の純粋さはどこ行っちゃったの // 黒井くろい 君!?!」

柀木に「黒井」と呼ばれた男は、拳を二、三回握ったり開いたりして感触を確かめた後、非常に残念そうに呟く。

それに驚愕しながら言葉をぶつける柀木。

「……眠いんで……無理だろうと思うけど、勝ちに行かせてもらいます……!」

「うわわっ!」

そのまま問答無用で殴り掛かってくる黒井。

それを尻もちをついた状態から立ち上がって、防御していく柀木。

黒井の攻撃には、彼方のような速さや藤原のような威力はないが、柀木の的確に急所を狙っていく。

眉間、鼻、顎、胸、鳩尾、等々……攻撃箇所を選択には迷いがなく、そして容赦がない。

「うわっ!?! ちよ!?! ちよっとタイム!?!」

「待つわけないでしょ……!」

焦りの余り中断を求める柀木を無視して殴っていく黒井。

「! チッ!」

「へ?」

だが、黒井が舌打ちをしたかと思うと、今度は柀木ではなく黒井の姿が掻き消える。

柀木は思わず呆けてしまった。

その直後、黄金に輝く光の剣がその場を薙ぎ払った。

「えあっ!?!」

横つ飛びに回避する柀木のすぐ横を、光の柱というべき巨大なものが通り過ぎる。

そこに込められた威力はすさまじく、母なる大地が削り取られていた。

もし、柀木がその場にいたなら、障壁を張っていても無事では済まないはずだということが分かるほどに、その傷跡は深かった。

「ヒエッ……」

怯えたような声を出し、冷や汗を流す姿には最初の時の威厳などなかった。

そんな柅木の傍に誰かが降り立つ。

それはヨーロッパ系の顔立ちに輝くような金髪を持った少年であつた。

その少年は柅木の姿を見ると、心底残念そうに言う。

「あくあ、外れちゃった……」

「ブ、ブライト」君!?! 君、師匠になんてことを!?!」

「師匠云々は今は関係ないでしょ? それにこのやり取りいつもやってるからっ!」

「待ってえ!?!」

そう言うや否や、手に持った黄金に輝く剣を振って柅木を攻撃するブライト。

だが、先ほどより精神的安定を取り戻したのか、切りつけてくる剣を的確にさばいていく。

「待って待って!?! なんで今日はこんなに攻撃が苛烈なの!?!」

そういう柅木は、何が起こっているのか分からないと言った顔をして、ブライトに問いかける。

そんな柅木に、ブライトは額に青筋を浮かべると、こう言った。

「分からないん、ですか!?! あなたがっ!?! この間っ!?! 起こしたことのっ!?! 所為でっ!?! 僕達はっ!?! 焦ったんですよお!?!」

「ええっ!?!」

怒りのままに剣を叩きつけるブライト。

柅木の脳内は疑問符でいっぱいだった。

「分からない? その様子だと分かっていますよね? じゃあ言つてやりますよ!」

罅迫り合いをしながら怒声を上げたブライトはキレ気味に捲し立てる。

「この間ご友人と会食に行かれましたよね? それは良いんですよ?

別に友人と食事に行くなどというほど仕事があつたわけではありませんし、金銭に関してもあなた自身が稼いできたものなので文句はありませんよ……。ですがあ! 何故! 異能を! 行使したん!

ですかあ!?!? それもっ! 見られているっ! 可能性がっ! ある

場所です！ 行使するなってっ！ 言われてるのをっ！ 覚えていらつしやられないんですかあ!!?」

「ぬおっ!」

ブライトが罅迫り合いから一気に押し込んで柊木をぶっ飛ばした。たたらを踏んだ柊木は、体勢を立て直すとブライトをまつすぐ見つめる。

そこには、完全にキレているブライトの姿があった。

「あなたがいない間、僕達がどれだけ関係各所に怒られたか知っていますか？ 知りませんよねえ！ 僕達が激務に追われている横です！ ご友人の方とっ！ 二人です！ 焼肉に行っていたんですからあ!!」

「……ごめん。ホントごめん。後で休暇を出します」

あまりの剣幕に、姿勢を正して頭を下げる柊木。

しかし、謝って済むならこんなにキレていないのだ。

「……と、いうわけでですねえ、潔くぶっ飛ばされてきてください♪ ちなみに、拒否権はありません♪ キレてるのは僕だけではありません♪ のので♪ それでは……」

「え、ちょ!?! 待ってえ!?! あっぶな!?!」

「死にさらせ柊木いいいいいい!!」

黒井が消えた時と同じように、突然姿が掻き消えるブライト。

助けを求めようと手を伸ばそうとした瞬間、またも横合いから攻撃が飛んでくる。

「み、皆ごめええええええええん!!」

このあと、全員から容赦ない攻撃をぶつけられ、心身ともにこれまでに体験した以上の疲労を負いながらも、結局は柊木が無傷で勝利した。

ちなみに、模擬戦終了後、ボロボロになった皆に土下座をしながら、休暇などを渡したらしい。

「皆、ごめん……」

「「「「「「「「「「「謝るならそもそもすするな!!」「」「」「」「」「」「」

## 炎龍

「あらら……伊丹の兄ちゃん、変な人に絡まれてら」

そう言うのは、異能力者達が乗り込んでいる装甲車のルーフに座り込んで周囲を警戒する男は、前方に位置する車両に乗っている男の名前を呟きながら状況を観察していた。

その呟きが聞こえたのか、運転席から顔を出した竜司が声を掛ける。

「ああん？ 伊丹がどうしたってんだ？」

「伊丹の兄ちゃんが、なんかすっげえ美人な女の人に絡まれてんだよ」

「ああ、あのおっかない姉ちゃんか」

「あんなデカいハルバードを片手で持つなんてスゲー筋力だぜ。あの細腕のどこにそんな筋肉が詰まっているのか……」

そう冷静に分析する男。

たなはし いっき  
名を柵橋樹という。

それなりに伸ばしたというか、めんどくさくて切らなかつたらここまで伸びてましたという具合のボサボサした黒髪を風になびかせ、日本人らしい黒目を遠くを見るように目を細めている。

樹の身長は、座っているためよく分からないが、おそらく百六十半ば程度の身長だろう。

そんな彼の服装は、一般的な異能力者達の隊服である黒い作業服ではなく、少し改造された隊服だった。

半袖半ズボンのラフな格好に、背中には鞆に納められた刀がある。靴も改造されており、本来なら脛までを覆っているコンバットブーツのようなものではなく、スニーカーのようなもの。

一見、コスプレか何かだと思われるそうだが、これでもれっきとした隊服なのだ。

実は、異能力者の隊服というのは、一定以上の階級になる、もしくは

は大量の資金を払うことで改造することができるのだ。

そのため、異能力者の間では隊服を改造しているというのは、一種のステータスとして認識されている。

もちろん、金を積むことで改造した者もいるが、そういった者達は未熟というわけではなく、むしろ修羅場を潜ってきたことで資金を調達し、その末に改造したとなればむしろ隊服の方が見劣りしてしまうだろうほどの実力を持っているはずだ。

ということは、樹は異能力者の中でもちやんとした実力を持っているという証明であった。

実際、樹の階級は若いながらも「上級」に位置する実力者である。

今回の派遣のメンバーでは上から二番目に高い実力を持つ異能力者であった。

ちなみに、一番は竜司である。

そんな樹は、何かを感じ取ったのか目を据わらせて、匂いを嗅ぐようにして鼻をスンツと鳴らすと、運転席の竜司に声を掛ける。

「……なあおっさん……ちつとばかし嫌な予感がするんだが……」

「奇遇だな。俺もだ」

樹の言ったことに竜司が同意する。

「いやな予感がする」

その直感は意外と早く的中した。

~~~~~

「うわあ!?!」

「きゃあつ!?!」

「ぬおっ!?!」

「イテツ!?!」

「しっかり捕まってるよー!」

エンジンが唸りを上げ、避難民を乗せた装甲車を加速させる。

ハンドルを握るのはもちろん竜司だ。

竜司はその巧みなハンドリングで避難民の多く乗った装甲車を右に左に動かしていく。

車内に収容されていた女、子供、老人はその急ハンドルと加速に振り回され、あちこちに体や頭をぶつけていたが、歯を食いしばって懸命に耐えている。

車窓から見えるのは、逃げ惑うコダ村の人々。

そして、それを覆う黒い影。

炎龍である。

コダ村を脱出して3日、どうやら無事に炎龍の活動域を脱出できたと思つた矢先に、唐突に現れた炎龍が、獲物を見つけたとばかりに避難民達に襲い掛かってきたのだ。

炎龍がここまで進出してきたのにはそれなりの理由がある。

炎龍出現の知らせを聞いたコダ村とその付近の村落の住民達が一齐に避難し、巢の周囲では餌となる人間やエルフを見つけてくることが出来なくなつてしまったのだ。

そのため、わずかな臭いを頼りに、人間がいるであろう地域まで遠出してきた。

そして、避難に手間取つた挙句、多量の荷物を抱えていたが為に移動速度の遅くなつていたコダ村の村民に狙いを定めたのである。

「怪物退治は俺等の仕事だが、タイミングが悪すぎるんだよ!!」

天空を飛翔する炎龍に向かって、怒りのままに恨み節を吐き捨てる竜司。

確かに、異能力者というものは怪物退治を生業とする職業だ。

しかし、こうも避難民を抱えた状態で戦えるかどうかと言われると否定せざるを得ない。

確かに竜司は強い。

なにせ、数多くいる異能力者の中でも「特級」の称号を持っているのだから。

だが、竜司の本来の強さと今の状況は別物だ。

そして、今の竜司が目標としているのは、この避難民を守り抜き炎

龍を振り切ること。

決して、戦うわけではないのだ。

そんな時に炎龍が、蹲って動かなくなった村人に狙いを定めて襲い掛かろうとする。

あわや、喰い殺される。

と思ったその時であった。

「うわっ!?!」

「飛ぶよっ!」

目を見張るような速さで接近した樹が、村人を抱えて飛び上がる。その際、樹の体から風が吹き出され、飛び上がった樹の体を加速させた。

そのおかげで間一髪、炎龍の攻撃から逃れられる。

そして、誰もいなくなつたことで攻撃を外した炎龍は、苛立たしげに飛び去る樹を見ようとしたが、その背中を無数の弾丸が叩いた。

炎龍が振り向くと、そこには伊丹達が乗る装甲車がある。

「全然、効いてないっすよっ!?!」

「かまうな!! 当て続ける!! 撃て撃て撃て!」

効いていないと言う笹川陸士長ささかわに怒鳴り返す伊丹。

巨大な体と強靱な鱗を持つ炎龍には、遊戯用空気銃のBB弾程度の威力しかないとはいえ、それでも感覚はあるはずと部下達に命令を下す。

浴びせられる銃弾に、さしもの炎龍も辟易した様子を見せる。

その様子を、炎龍の注意から外れた車内で見ていた竜司は感嘆とした声を上げる。

「さすがの自衛隊様だ! この状況にも対応するなんてな!」

思わず血が騒いってしまったと心の中で呟き、興奮したように戦っている様子を見つめながら装甲車のハンドルを操作して、炎龍からどんどん距離を取っていく。

そんな竜司の乗る装甲車の屋根に村人を担いだ樹が降り立つ。

「どうだった坊主!?! 攻撃の効き具合は!?!」

「でけえ声出すなって! やって見た結果としてはダメだ! お相手

さんの「神秘」が強すぎて俺程度じゃ掠り傷一つ与えられねえ！」
そう言った樹の手には刃こぼれした刀があった。

実は、今から数分ほど前に炎龍が襲い掛かってきたが、何も自衛隊だけが戦っているわけではない。

樹も含めた今回の遠征に参加している異能力者達は自衛隊よりも早く炎龍の接近を感知し、率先して攻撃を加えていたのだ。

しかし、樹が言った通り、異能力者と自衛隊の攻撃は中々通用せず、圧倒的な戦闘力を有するはずの異能力者達の攻撃が効いていなかったのである。

それには理由があった。

そもそも異能力者とは、異能という名称の力を使っているだけでの本質は「魔法」。

そして、炎龍はその名の通り、神秘の頂点である「龍」なのだ。

よくある幽霊を倒す物語では、その幽霊と近い力で戦うものが多いと私は思う。

それは異能力者達も同じで、地球に時たま出現する怪物——「怪異」という存在と戦うために異能を使っている。

何故ならば、その怪異は魔力の籠ったものでない限り、掠り傷一つつけることなど出来ないという特性があるからだ。

怪異は幽霊のようなもので、その実態は魔力の塊。

魔力という不可思議なもので存在を固定しているからか、ただの拳銃などでは攻撃がすり抜けてしまう。

そのため、魔力で肉体を構成している怪異には、同じく魔力を纏ったもので対抗することが必須なのだ。

しかし、炎龍は怪異とは比べ物にならない存在だ。

怪異は肉体を持たないのに対し、炎龍は確かにその肉体を持っている。
る。

これだけでも脅威なのだ。

さらに言えば、その存在の格は最高位の「龍」。

分からないという人に解説しよう。

先程、怪異を幽霊に例えたがそれに関してはほぼ間違いない。

怪異とは、「地球」とは別の世界——反転世界に存在する生物らしきものだ。

生物らしきものと称したのは、彼等は生殖などせず、種によって特定の行動をする以外生物らしい行動を行わないからである。

一応、食事らしき行動をとるのだが、その行動理由についても今だ分かっていない。

栄養を摂るためなのか、それともただ食らいについているだけなのか、それすら分かっていないのだ。

そして、怪異が生物らしくないとほぼ断言できるものの一つとして、「死亡した場合、肉体の一部の器官を除いて塵となってしまふ」ということだ。

怪異は何のために生まれてきたのか分かっていない一方、その特徴から発見当初は非常に驚かれたようである。

幽霊は何かを依代にしているが、怪異も同じく何かを依代としている。

それが先ほど言った塵であるのだ。

こういった生物とは言い難い特徴を持っているため、更に成仏死亡したら消滅するということから、「怪異は幽霊」と言われる原因の一つとなっている。

これらを踏まえて、炎龍に話を戻すと明らかに生物と言える行動をとっている。

「腹を空かせたから、人間を襲って食らう」という行動だ。

腹が減るということは、栄養を必要としているということ。

なら、怪異とは違い肉体を持っているということだ。

「肉体を持っているからどうしたのだ？」と思う者もいるだろう。だが、割と深刻な問題なのだ。

怪異というものは砂や塵を依代に、周囲の魔力を取り込むことでようやく形を保っている。

しかし、それらの脆すぎるものを依代にすると出来上がるものは貧弱でしかない。

更に、それらを維持するために膨大な魔力を必要とするため、魔力

のない場所にでもいたらものの数秒で消滅してしまうのだ。

そのため、怪異はより強靱な依代を求めて地球にやって来る。

だが、炎龍は生まれながらにして肉体を持っている。

それも見上げるほど巨大で強靱な肉体を。

しかも依代ではなく自前のものだ。

怪異を「出来損ない」とするなら、ちゃんとした「完成品」が炎龍。

只人の魔力で掻き消えるような存在ではない。

例えるなら「山」だ。

魔法という神秘を炎龍に通すには、それこそ炎龍ほどではないにして強力な神秘が必要になってくる。

異能力者の言え、それこそ「特級」レベルでないと歯が立たない。
い。

要するに、デカイものを動かすにはデカイものをぶつけねばならない理論で、今この場にいる異能力者では炎龍に歯が立たないのだ。

……もつと言え、炎龍がとある神の加護を受けているため、並の異能力者では攻撃が聞かないというのも理由に入るのだが、今の彼等に走る由もない。

「やっぱりか！ そいつあ大物だな！」

「喜んでんじゃねえよ！」

ハンドルを握りながらも、背後の戦場に思いを馳せる竜司。

久しぶりの大物に不思議と唇が弧を描く。

そんな時に、その背後から爆音が聞こえた。

「な、なんだあ!？」

思わず驚いたように振り返る樹。

そこには、黒煙を上げている腕があつた場所を抑えて苦しむ炎龍の姿があつた。

一拍遅れて、地面に炎龍の腕が落ちる。

原因は、そう伊丹達自衛隊だ。

「なるほどっ！ 神秘を押し潰す現代兵器なら、神秘を無効化して通用するってなっ！」

そう興奮したように話す竜司の眼には、伊丹達の装甲車から今まで

使っていた機関銃とは違う兵器が見えていた。

110mm パーソナル 携帯対戦車弾

厚さ七十cmもの鉄板を貫通する能力のある、個人携行する火器としては凶悪な破壊力を有する武器である。

それならば、巨木のような炎龍の腕が千切れたとしても不思議ではないだろう。

しかし、巨木を切り落とすことならば樹ですら可能なことだ。

では何故、樹達異能力者の攻撃が効かなくて、伊丹達自衛隊の攻撃が効くのか？

それに関しても神秘云々が関係してくる。

神秘とは、過去の地球にもあったかもしれない「歴史の姿」のことだ。

時間が経るにつれ、昔は存在したかもしれない竜などは現代では見かけなくなってしまう。

これが神秘の減少に基づく、世界の変革だ。

そして、時代は人間の時代になっていく。

詳しいところは省くが、このことから神秘を無視して成長する人間の武器は「神秘を無効化する力」を得たのである。

……中には、神秘を無視する現代兵器を自身が持つ神秘で押し潰してくる規格外がいるのだが……

おう、お前のことだよ総司令。

オホンツ……

そのため、伊丹達の武器が炎龍に通用したのである。

しかし、そんなことを知らない伊丹達は動きが止まってしまう。

その隙に、空に舞う炎龍。

翼を広げ、よたよたとよろめくようにしながら、高度を上げていく。

その場にいた者達は、その後ろ姿を黙って見送るだけであった。

アルヌスの丘にて

炎龍が撃退された。

そんな話を聞くと、誰もが「嘘だろうか？」と疑う。

何故ならば、炎龍とは動く「災厄」そのものとして知られているのだから。

実際、エルフの村が丸々一つ焼き払われ、生き残ったのはたった一人という結果を見ずとも、この世界に生きるものからしてみれば、炎龍とはそういうものだとは認識している。

そんな炎龍が撃退されたのだ。

少なからずとも犠牲者は出てしまったが、炎龍の力を知る者達は、「よくその程度で済んだものだ」賞賛するほどの偉業である。

そして、その噂を聞き付けた者達が「で、その偉大なる勇者ってのは、誰なんだ？」と関心を抱くのだ。

その者達は……

~~~~~

「……………」

そんなうわさが広まっている中、この世界——こことは世界を隔てた場所にある地球では「特地」と呼ばれる世界のアルヌスの丘と呼ばれる場所にその男は立っていた。

彼は紺色のジャージに、両腕全体を覆うように包帯を巻きつけているという少し奇抜な恰好をしているが、怪我人というわけではなく、ましてや厨二病患者というわけでもない。

むしろ、彼は作業を行うほどに元気な健常者であった。

「……………」

そんな彼は、小高い丘から見える広大な景色をただジッと見つめているだけだ。

そこには、空に伸びる摩天楼しか見ることのできなくなった日本人が素晴らしい自然を見た時に感じる感動の気持ちや、それを壊すかのように攻撃を開始する侵略者達への警戒心というわけでもない。

この自然に身を任せ、ただボーっとしているだけなのだ。強いて言うなら、未だ慣れない環境にそわそわしている、と言ったところである。

「なくにしてんの？」

そんな彼に声を掛けてくる者がいた。

彼はその声がある方向——背後に振り向く。

そこにいたのは、上はタンクトップを下には作業ズボンを着て、頭には「安全第一」と書かれた黄色いヘルメットをかぶり、手には軍手をはめているという、ザ・大工とも言うべき格好の女性が立っていた。作業の邪魔にならないようにと綺麗な茶色の髪をポニーテールに纏め、しかし、作業人にしては似合わないような出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいるという魅力的な肉体をしている。

そんな彼女は、人好きのするような笑み、もしくはいたずらっぽい笑みを浮かべて彼を見ている。

「……『雲雀』か……何の用だ？」

そんな彼女の名は石井雲雀<sup>いしいひばり</sup>。

今回の派遣で特地にやってきた異能力者の一人だ。

雲雀は、景色を眺めていた彼に笑顔で近づいていき、肩に腕を回す。「相変わらず不愛想だね。そんなんだからいつまで経っても子供に泣かれるんだよ？」

「……精進する」

「ほら、そういうところが硬いんだよ。もっと口角上げて」

「……………」

そう言っつて雲雀は彼の口角を上げようと、頬に指を当てて、むにむにと引き延ばす。

無理やりされているからか、硬い彼の表情と相まって変顔になってしまっている。

豊満なバストが当たっているが気にしてないようだ。



「……年頃の女が無暗に抱き着くな」

「おろ？ 気にしてくれてるの？」

彼が気にしていることを指摘すると、更に笑顔になって抱きついてくる。

彼の鬱陶しいという視線も気にせず。

「……違う。お前はもう少し節度って言うのをだな……」

「ほらほらあこうというのがいいんでしょ？ もっと味わってもいいんじゃないよ？」

そういうや否や、今度は正面から抱きついてくる。

まるで、まとわりついてくる猫のようだと心の中で思う彼。

行ってもだめなら、と彼は実力行使に出た。

「……………ハア……………」

「ん？ 諦めて堪能する気になっ……………あのお……………伊織」さん？

なんで私の頭を掴んでるのでしょうか？

「言っても聞かなそうだからな……………実力行使だ」

「ちよ!? あなたの握力で握られたらシヤレにならないんで——ああああああ!!? 頭がああああああ!! 割れるっ!? ミシミシいつ

てるんですけど!」

「余裕そうだな？ ならもうちよつと力を込めるか」

「ああああああああ!!」

抱きついていた雲雀の頭を掴み、力を加えていく彼。

本名水瀬伊織<sup>みなせいおり</sup>。

そんな光景を見る通りすがりの者達は、「ああ、またか」と、特に気にした様子もなく通り過ぎていく。

「あっ!? 仕事の時間だ!? い、伊織！ ほら！ 私！ 仕事入った

から！ 行かないと！」

「……………チツ」

「ふう……………もうすぐで私のハイスペックな頭ちゃんが握りつぶされるところだったよ」

「……………早く行け。親方に怒られるぞ」

「頭が割れそうになったのは伊織の所為でしょ!? ま、いいや！ ま

「た後でね〜！」

「……………」

手を振りながらどこかへ駆けていく雲雀を見送る伊織。

そんな彼は、またさっきのように景色を眺めるのではなく、背後に広がる町へと歩き出す。

彼もまた、仕事があるからだ。

~~~~~

伊織がたどり着いたのはある作業場。

近くには、山のように積まれた木材があり、その近くには建設途中の建物があった。

そこでは、鍛え抜かれた肉体の男達が、互いに声を張り上げ指示を飛ばし合っている。

周囲には、すでに完成した建物があり少しだけ狭さを感じた。

そんな中、周りにいる作業員なんかよりずっと声を張り上げて指示を出す初老の男性に、伊織は迷うことなく近づいていく。

そして、親しげに声を掛けた。

「親方、休憩から戻ってきた。指示をくれ」

「ああん!? つと、なんだ伊織か……休憩は終わったって? ならあの建材をこつちに運んでくれや」

「分かった」

伊織に親方と呼ばれた男性は、伊織に指示を出し、木材を持ってきてくれと言う。

それに短く返事をした伊織は走って建材の下へ向かっていく。

その下に着いた伊織は、建材を見上げる。

周囲の建物の半分に届かないとはいえ、その数は膨大だ。

「これか……よし……!」

普通なら、重機などを使い運んでいくはずなのだが、伊織は建材を

二、三本小脇に挟んだかと思うと、
軽々と持ち上げた。

ヒョイという効果音がつくほど軽々とはないが、それでも数百キロはありそうな建材を持ち上げるといふ人間離れした力を見せつける伊織。

もうすでに分かっているであろうが、伊織は異能力者だ。

それも、常人の最高到達点である「上級」の異能力者である。

特級ではないにしても、その力はすさまじく、このように建材を軽々と持ち上げることなど造作もないのだ。

そして、建材を持ったまま親方と呼んだ男性の下まで運んでいく。

何故、伊織が運んでいるのかについては理由がある。

実はここはもうちよつと早めに建築される予定だったのだが、指示のミスにより後回しにされてしまい、建材はあつても重機が到着するのに時間がかかる場所になってしまったという事情がある。

そのため、伊織のような異能力者の手を借りて建築しているのだ。雲雀も建築を担当とする異能力者の一人である。

尤も、伊織のような運搬担当ではなく、建設を担当とする者だが。

その後も、時間がかかったとはいえ、建材の全てを運び終えた伊織は親方に声を掛ける。

「親方。これで全部持ってきたぞ」

「よし！ 後は俺達に任せな！ お前はもう上がっていいぞ」

「？ もういいのか？」

仕事を終わってもいいと言われ少しだけ疑問に思う伊織。

それは他の者も同じようで不満を口にする。

「えく!? 伊織だけずりいっすよ！」

「俺達にも休暇をくれよお！」

「やかましい！ そんなこと言うならもつと働け！」

「へくい………つたく、人使いが荒いなあホント………」

不満を口にしながらも作業に戻っていく者達。

それを聞いた伊織は、やはり親方の言葉が疑問に残っているようである。答えを知るためにもう一度聞いた。

「親方。俺はまだやれる。俺のどこが不満なんだ？」

「ん？ いんやあ？ お前さんの仕事っぷりに不満はねえよ。むしろ働き過ぎって言いたいんだがな」

「俺が、働きすぎ……？」

「その顔……分かってねえ顔だな。ハア……」

伊織の呆けた顔に溜息を吐いた親方は、伊織の頭にそつと掌を乗せると優しくなでる。

「お前みたいな若いもんは体が基本なんだ。無茶して明日の作業に差し支えてみる。いろんな人の迷惑になっちまう。そう言うのは嫌だろ？」

「それは……確かに、嫌だ」

「だからこそ、お前さんはもうちよつと休め。雲雀の嬢ちゃんと飯でも食いに行つてこい」

「……分かった」

渋々ながらも親方の言葉を聞き入れて作業場から離れていく伊織。その後ろ姿を黙って見送った親方は溜息を吐くと作業に戻っていった。

~~~~~

作業が終わり、ちょうど太陽が頂点に差し掛かる頃。

伊織はいつもの場所に向かっていた。

それは……

「あ！ 伊織兄ちゃんだ！」

「伊織兄ちゃんお帰り〜！ お仕事頑張った〜？」

「伊織兄ちゃん！ 勉強教えてくれよ！」

「肩車してくれる？ 伊織お兄ちゃん？」

「え〜！ 私が一番最初に伊織お兄ちゃんと遊ぶんだもん！」

「俺が先だよ！」

「むむむ〜！」

避難民の中で幼い子供たちが集まる遊び場だ。

そこに伊織は毎日のように通っている。

伊織は異能力者である以前に一人の人間だ。

もちろん、将来の夢もある。

なにも、異能力者になつたからといって、ずっと異能力者として生きていくわけではなく、ちゃんとした仕事に就くものが大半だ。

伊織もその一人で、そんな伊織の将来の夢は保育士や先生である。

そのため、今回の派遣中にもそれらの体験をして経験を積むために、こうして特地の子供たちと触れ合っているのだ。

「……喧嘩は良くないぞ。大丈夫、一人ひとり聞いてあげるから。それじゃあ、先ずはルカから」

「私？ えつとお…… “だるまさんが転んだ” だっけ？ をしたい！」

「分かった。じゃあ、いつものように俺が鬼をするよ」

「二」「やったー！」「三」

仏頂面の伊織とはいえ、ちゃんと表情を変えることはできる。

それでも満開の笑顔というわけではなく、ニコツと笑うだけだが、子供達にはそんなことを気にすることは無いようだ。

そうして始まった「だるまさんが転んだ」。

結果としては、子供たちの勝ちである。

「やったあー！ また勝ったー！」

「私が一番最初にタッチできた！」

「……よかつたな」

子供たちが満面の笑みと共に抱きついてくるのを受け止めて、伊織は満足げに目元を緩める。

そんな時、誰かのお腹が鳴った。

それにつられるかのように、子供たちのお腹が鳴りだす。

「あ、ご飯食べてなかったんだ……」

「私も〜」

「俺も〜」

皆が口々に空腹を訴えるので、仕方ないと首を竦めた伊織は子供たちと言った。

「……ごはん、食べに行こうか」

「良いの……?」

「まだ開いてるはずだから、お母さんたちに許可をもらっておいで」

「許可……?」

「……それをしてもいいよってことを聞いてくることさ。わかったかい?」

「うん! 分かった!」

そうして、それぞれの家族が居住している建物に向かって散らばっていく子供達。

手を振りながらその姿を見送った伊織は、深呼吸をすると胸に手を当てて自身の鼓動を感じる。

我ながら緊張していたと、速くなっている鼓動を噛み締めながら、地面に腰を下ろす。

「綺麗だな……」

それは景色についての感想だったのか、それとも子供達とのふれあいか。

「悪くない」

そう締めた伊織は、子供たちが来るまで待っているのであった。

~~~~~

「伊丹さん……こんにちは」

「あ! 緑の服のおじさん! こんにちは!」

「……なんだ伊織か。それと子供達……飯でも食いに来たのか?」

「そうですね。隣、失礼します」

「失礼します!」

全員が許可をもらって再集合し、向かった先の食事処には先客がい

た。

カウンター席に座っているくたびれた男性——伊丹がラーメンをすすりながらこちらを振り向く。

そんな伊丹に挨拶をしながら、伊織と子供たちはそれぞれ好きな席に着いて食事を注文し始める。

伊織は同僚として、子供たちはこの場所まで連れてきてくれた優しい人として。

伊織は迷うことなく、かつ丼を注文し、子供たちは文字が読めずに伊織の手助けを借りておいしそうと思っただけのものを注文した。

やがて、それぞれの注文したものが届き、「いただきます」と食前の挨拶をしてから食べ始める。

しばらくして、その光景を眺めているだけだった伊丹が、伊織に質問した。

「……なあ、なんで伊織は俺と同年代ぐらいなのに敬称をつけるんだ？」

「……愚問ですね。俺達の総大将とその副官、その友人には敬称をつけるのが俺達異能力者の暗黙の了解なんですよ」

伊丹の質問に、口に含んだカツを飲み込んでから答える伊織。

その答えを受けて、納得のいかないような、あの野郎何やってんだと言うべきかよく分からない顔をしている伊丹に、伊織は問う。

「逆に、そんなに気にすることですか？」

「いや、気にするって言うか、むず痒いんだよ。こう、同年代にさん付けで呼ばれると……」

もう空になったどんぶりを前に、後頭部をかきながら伊丹は言う。確かに、そんな歳の離れていない同年代。

それも、現在では同僚と言うべき人物にさん付けをされるのはなかなか慣れないものだ。

そんな伊丹の様子に、伊織は言った。

「つまり、馴れ馴れしくしてほしいんですか？」

「ん〜……まあ、そんなところかな」

「それなら俺には無理です。命の恩人である総司令の友人とはいえ、

他人には敬意を払うのが俺なんで」

「そつか……ん？ 待て、『命の恩人』って言ったか？」

伊織の言った言葉の中に気になることがあったのか強調して言う伊丹。

そんな、伊丹にあっけらかんと答える伊織。

「そのままの意味ですよ。総司令は俺の命の恩人。殺されかけてた俺と姉を救ってくれたのが柗木さんですから」

「……アイツ……何やってんだよ……」

どこか尊敬の籠った眼差しを虚空へと向ける伊織と、友人のやってきたことを想像して頭を抱える伊丹。

いろいろな疲れがピークに達している伊丹に、とどめになるであろうことを告げる。

「それに……伊丹さんは俺の姉さんを救ってくれたので、敬称は外せません」

「……へ？」

突然の伊織の言葉に呆けた声を出す伊丹。

そんな、伊丹を放っておいて伊織は話を続ける。

「あの銀座事件の時に、俺と姉さんはいました。だけど、様々なしがらみの有る異能力者の俺は力を使うことが出来ず、みすみす姉さんを死なせてしまうところでした。だけど、総司令が動けなかった時に伊丹さんが動いてくれたので、あの場にいた姉さんは死んでないんです。だから、伊丹さんには感謝の念が尽きません。こんな場所で言うのもなんですが、俺の家族を救ってください、誠にありがとうございます」

「わ、分かったから、頭を下げないでくれ……」

そう言っつて、頭を下げる伊織。

知らず知らずのうちに、現在同僚となつている男の家族を助けていたことが判明した。

謙遜する伊丹の手を握り、深く感謝を伝える伊織。

子供たちは、少しだけ気になったりもしたが、事前に伊織から伝えられていたので特に驚きもしなかった。

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

この後、仕事終わりの雲雀に絡まれた伊織を子供たちがからかったり、勉強会を開いたりなどして時間が過ぎていく。
こうして、伊織の住む街の一日は過ぎていった。

死神ロウリイと重機関車

ロウリイ・マーキュリーは死と断罪と狂気と戦いの神・エムロイに仕える神官であり、同時に人の肉体のまま神としての力も得た亜神と呼ばれる存在でもある。

亜神となると、まず不死身の肉体と獣系亜人をも上回る身体能力が手に入る。

だから首チョンパされようが手足をもぎ取られようが内臓を破壊されようがすぐさま回復するし、大の男でも到底持ち運べない巨大で重量のあるハルバードを小枝のように振り回しながら軽業師よりも見事な曲芸を決める事もロウリイには容易い。

また亜神になった時点の年齢で肉体の成長も止まる。

ロウリイが亜神になったのは10代前半の頃である。

でもって人間時代のロウリイが生まれたのは1000年近く昔の時代である。

つまりロウリイは少女の外見でありながら実年齢は約1000歳、より正確には961歳という、高齢者なんてレベルじゃない存在なのであった。

だものだから、彼女はそんじよそこの老人や賢者などメじやない人生ならぬ神生経験の持ち主である。

そして先に述べた通り、彼女は死と断罪そして狂気と戦の神であるエムロイの神官でもある。

ゆえにロウリイは、血の臭いに敏感だった。

なにせ彼女自身がその手を血で染める機会など100や200や利かないぐらい経験しているのである。

永い神生において、血の臭いほど嗅ぎなれたものはないと言っても過言ではない。

だからこそ、最初に出会った者達の中で特に濃い血の匂いを漂わせていた伊丹に接触したのだが、後々になってもっと興味深い者達がいることに気付く。

それが、異能力者だ。

「ねえあなたあ？ 少し話をお聞きしてもよろしくてえ？」

「あん？ どうした嬢ちゃん……って、これ前にもあったな……」

ジエイタイの者達と親しそうにしながら、言葉の通じないジエイタイの者達と比べて会話が通じる者達であり、そして、炎龍に手傷を負わせられなかったとはいえ、犠牲者などなく避難民全員を救出して見せた強力な魔法を使う者達のことであった。

まさしく、神代の英傑のような者達が何人もいたという事実は、長く生きてきたロウリイであっても予測できなかった事実。

だからこそ、彼等の拠点である場所に着いた時には真つ先に話しかけることにしたのだ。

そんな異能力者の中でも、気配だけで分かるほどの力を持った大男に話しかけてみる。

場所は、鉄の馬車が多く存在する“チュウシャジョウ”と言う場所だ。

鉄の馬車に寄りかかるようにして立っていたその男は、邪険にするわけでもなく、ただ「なんで自分なんか……」という疑問が顔に表れているだけであった。

その男は、飲み物を一口含み、飲み込んでからロウリイに向き直る。その体は歴戦の兵士の肉体が可愛く見えるほどに鍛えられ、そしてその腕は丸太のように太い。

ジエイタイのような兜などの防具の類は欠片も装備しておらず、袖の短い黒色のコートに同色の光沢のあるズボンを穿いている。

惜しげもなく晒される腕と胸板は無駄な贅肉などなく、極限まで引き締められていた。

目元だけを隠す黒いバイザーに秘められているであろう視線は射貫くように鋭く、しかし、どこか優しさを感ぜさせる。

そして、極めつけはその体から漏れ出る魔力の密度。

うまく隠しているようだが、感覚を研ぎ澄ませてみればその膨大な魔力に後退ってしまう。

例えるならば、少しづつしか流れない小川をたどってみれば、渡ろ

うものなら押し流されるほどの勢いがある大河を見つけてしまったようであった。

改めて分かる男の威容に息を呑み、恍惚の表情を浮かべるロウリイ。

あの時、炎龍と相對していた者達も素晴らしい英雄だったが、目の前の男と比べると見劣りしてしまう。

もし、この男が炎龍と相對していたのならば、炎龍派での一本では済まされないほどの傷を負っていただろう。

そう思わせるほどに、目の前の男——山内竜司は戦士として練り上げられていた。

「で、嬢ちゃんは俺に何の用だ？ この町のことなら俺には聞くなよ。もつと詳しい奴がいるからな。もし、そうだとしたら案内をしてやるが……」

「いいええ？ 私が聞きたいのはあ、あなたほどの人があなぜこんな場所にいるのかと思つたのよお」

「……俺はしががないタクシードライバーさ」

「〃たぐしいどらいばあ〃が何なのかは分からないけどお、私が聞きたいのはあそんなことではないわあ」

煙に巻こうと言葉を濁す竜司を問い詰めるロウリイ。

「じゃあ何が聞きたいんだい、お嬢ちゃん？ ……いや、お嬢ちゃんじゃねえな、アンタ結構な時間を生きてるんだろ？ できれば年齢を教えてくださいたいんだが……」

「今年でえ961歳になるわねえ」

「きゅ……!?!」

驚愕の年齢を言葉にされてその手に持った飲み物が入った容器を握り潰しかける。

それに気づいた竜司は、心を落ち着かせるために容器に入っている飲み物を飲み干した。

そして、ロウリイに向き直ると、すまなそうに後頭部へと手を置きながら謝罪する。

「……こいつあすまねえな。それならお嬢ちゃんって呼び方は失敬だ

な」

「大丈夫よお嬢ちゃんです。女としては若く見られたいと思うのが普通だからあ」

「そうか……なら、嬢ちゃんの名前を教えてください。いつまでも嬢ちゃんじゃ誰かと呼び間違えるかもしれないからな」

その言葉を聞いたロウリイは、自身の名前を口にする。

「私はあ、神エムロイに使える信徒ロウリイ・マーキュリーよお」

「ロウリイさんか……俺の名前は山内竜司。山内が姓で竜司が名だ。よろしく頼む」

「よろしくねえ」

互いに握手を交わし、一先ず会話のスタートラインに立つ二人。

まずは、ロウリイから質問が投げかけられる。

「あなたの本当の仕事はあ？」

「……言わなきゃなんねえか？」

「言わないといけないわよお」

本来の仕事に関して言うのを渋る竜司。

これは絶対に何かがあると確信するロウリイ。

やがて見つめ合ったまま、十数秒が過ぎる。

そして、竜司の方が大きいため息を吐いたかと思うと、腕を上げて降参の姿勢をとった。

「分かったよ。言うさ。その代わりに、そっちの情報もくれよ」

「話が分かる人で助かるわあ。それであなたの本当の仕事ってえ何なのかしらあ？」

今度こそ、答えが聞けると興味津々に目を輝かせるロウリイ。

その視線を受けながら、竜司は言った。

「俺の仕事は、若手の異能力者達のお守りだ」

「お守りい？ あなたのような人をお守りにするなんて、あなたの上の人はなにを考えているのかしらあ？」

「実際、俺はお守りに最適とは言えねえが、年長者として、尚且つ、実力者としてあいつらの為に、世間様の矢面に立つ覚悟はあるのさ」

「世間ねえ……あなたほどの戦士を縛るほどのものなのお？」

ロウリイは不思議に思ったこと、ジエイタイと異能力者が来たという地球について聞いてくる。

「ああ、俺達の住む地球という場所はここよりも大分発展している世界だな。そこでは、今まで魔法や魔物、ましてや、あの炎龍とかいう化物なんて伝説のものでしかなかったのさ」

「炎龍はともかくう、魔法にい魔物もかしらあ？」

「ああそうだ」

そう言つて、懐から黒い板——スマホを取り出す竜司。

ロウリイは興味深そうにスマホを眺める。

「これはスマホって言つてな。地球ではこれ一つで世界の裏側にいるやつと話ができるんだよ。もちろん、他にもいろいろなものがあるからこいつは機能するんだけどな。これには魔法の技術なんて欠片も使われてねえ。あるのはただの金属を細かく並べて、電気……雷が通るようにした、ただの技術なんだよ」

「それはすごいわねえ。国宝級のものよおこのすまほつて言う板ねえリュウジイ。これ私に出来ないかしらあ？」

「ダメだ。使い方が分からねえだろ。それに、高いんだぞこれ。つと、話が逸れちまったな」

話が逸れていたことに気がついた竜司が修正にかかると。

「俺達の世界では、ここみたいに治安が悪いわけではない。アンタにとつては普通だろうが俺達にとつては結構おかしいんだ」

「あらあ？ どういうところがおかしいのかしらあ？」

自分達の生活がおかしいと言われて、首を傾げるロウリイ。

そんなロウリイに、竜司は自分の考えを言った。

「この世界と俺達の世界を比べると、圧倒的に古いんだ。生活様式が。戦いが。法が。何もかも俺達のいる世界に比べて古いんだ。……魔法はどのぐらいなのか分かっていないがな」

「そこまで言うほどかしらあ？」

「そこまでさ。だつて分かるだろ？ 道中起きた問題に対しての自衛隊達や俺達の対応」

「そうねえ……」

竜司の言葉を受けて回想するロウリイ。

そんなロウリイの頭には、ここに来るまでに起こったある事故のことが思い浮かべられている。

そう、コダ村からこのアルヌスの丘に退避しているときに起こった事故。

コダ村の者が使用している馬車が脱輪した時のことだった。

この世界では脱輪したならばよほどの余裕がない限り、荷物を捨てなければならぬ。

だから自身の馬車が脱輪してしまったのならば、という事態に陥つたものの顔は絶望に濡れてしまう。

それを救ったのはジエイタイの者達と異能力者の者達だった。

彼等は誰に言われるわけでもなく、率先してそれらの問題解決に動いて、解決したのなら礼も聞かずに持ち場に戻る。

そんな行動をこの世界に住む者は不思議に思ったのだ。

それはロウリイだって同じである。

だからこそ、気になったロウリイはこうして竜司に理由を聞いていくのだ。

「あれが俺達の世界では普通なんだよ。って言っても、そんなことするのは俺達の国『日本』ぐらいだけだな」

「あらあ？ 他の国は違うのかしらあ？」

疑問の浮かんだロウリイは続けて質問する。

「ま、日本は他の国と比べても優れているっていうのをよく聞くけど。戦争を放棄した点も含めてな」

「戦争を放棄したあ？」

信じられない言葉を聞いたと言わんばかりに目を丸くするロウリイ。

だってそうだ。

あの炎龍を退け、それ以前から帝国軍に壊滅的な被害をもたらしておきながら、戦争を放棄しているという日本という国。

それに、竜司の言い方からして他の国は戦争を放棄していないというようにすることも察せられる。

もしかして、ジエイタイは手加減していた？

そんな考えが頭によぎる中、肩を竦めた竜司がその疑問を切り捨てる。

「日本もこっちの帝国と同じように戦争に負けてるんだよ。それも七十年前にな」

「長いわねえ……あなたはそれを実際に見たのかしら？」

「いんや？ さつきも言っただろ、俺達の世界は発展している。だから、七十年前の戦争も記録として残っている。ただその時の戦争の状態は、聞くだけで背筋が寒くなるようなヤバイ状態だったらしいんだってよ。丁度いい。ここにスマホがあるからその時の映像を流してやるよ。ただし、でけえ声を出さないでくれよ？」

「……分かったわあ」

竜司ほどの戦士が警告するほどのもの。

それはどういったものなのか。

好奇心に負けたロウリイは地獄の箱を開けてしまった。

~~~~~

竜司が開いた映像は日本が負け、そして世界でもっとも有名な戦争である、

第二次世界大戦についての映像だった。

第二次世界大戦とは、1939年9月から1945年8月まで、日本・ドイツ・イタリアの枢軸国すうしよくこく枢軸国とは、第二次世界大戦時に連合国と戦った諸国を指す言葉。とイギリス・フランス・中国・ソ連・アメリカなど連合国との間で起きた、世界的規模の戦争のこと。

もともとはドイツのポーランド侵入と、これに対するイギリス・フランスの対ドイツ宣戦により勃発したが、1941年12月に日本の



アメリカ・イギリスとの宣戦により世界大戦に発展する。

後に、1943年9月にイタリアが、1945年5月にドイツが、1945年8月に日本が降伏してようやく終戦を迎えた。

六年という、小学校入学から卒業までというそれなりに長い時間の間に亡くなった人の数は、

全世界で言えば、軍人の死者数が約2000万人。

民間の死者数が約4000万人という一国の人間が丸々一つ死んでなお余りあるような、そんな死者の数だ。

これは全世界の死者数であって日本ではない。

では肝心の日本はどうなのか？

日本では、軍人が約200万人。

民間人が約80万人という、これまた膨大な死者数だ。

そもそも、なぜ第二次世界大戦が起きたてしまったのか。

多くのきっかけが複雑に絡み合っているのでまとめるのが非常に難しくなってしまうが、それでも要点だけに絞ると、下記のようなる。

1. アメリカがきっかけで世界大恐慌が起き、他国へも波及
2. なかでもドイツ、日本、イタリアは経済的に苦しくなる
3. ドイツは第一次世界大戦で背負った賠償金200兆の負債で首が回らない
4. ヒトラーは経済的要所であるポーランドの奪還を図る
5. ポーランドと安全保障条約を結んでいたイギリス・フランスがこれに対抗
6. 第二次世界大戦、勃発

これらを解説していこう。

全世界の始まりが起きたのは1929年10月、ニューヨーク株式市場の株価大暴落がきっかけだった。

当時アメリカは世界の債権国となっていたこともあり、影響はアメリカ国内に留まらず、世界中に波及していく。

イギリスやフランスは、この危機を打開しようと「ブロック経済ブロック経済とは高関税によって他国の商品を排除し、自国や自国の影

響が及ぶ範囲でのみ貿易を行う経済保護政策のことを言う」を作ったのだ。

イギリスやフランスのように植民地を領有している国は問題なかったが、「そうではない国」はブロック経済に阻まれて、国際貿易ができずに経済的に苦しむことになりました。

ドイツや日本、イタリアがまさにその「そうでない国」経済的に窮地に立たされた国々」だった。

両国とも軍事力を使って領土を拡大することで、この問題を解決しようとする。

そう、植民地を得ることで自給自足を目指そうとしたのだ。

第二次世界大戦への道が決定的になったといわれているのが、1938年9月に行われた「ミュンヘン会談」だ。

ドイツが、ドイツ人が住民の多くを占めているチェコスロバキアのズデーテン地方を割譲するよう要求したのに対して、イギリス・フランス・ドイツ・イタリアの首脳が集まって会議を行った。

チェコスロバキアにとってズデーテン地方は、地下資源もあり工業地帯でもあることから本国経済の要であり、おいそれと譲れる場所ではなかった。

一方、「民族自決各民族集団が自らの意志に基づいて、その帰属や政治組織、政治的運命を決定し、他民族や他国家の干渉を認めないとする集団的権利。民族自決権ともいう。」を掲げるヒトラーにとって、ズデーテン地方をドイツに割譲することは理にかなったことだったのだ。

結果的にイギリスのチェンバレン首相による宥和政策戦争に対する恐れ、倫理的な信念、あるいは実用主義などに基づいた戦略的な外交スタイルの一つの形式で、敵対国の主張に対して、相手の意図をある程度尊重する事によって問題の解決を図ろうとすること。宥和主義とも。により、ズデーテン地方はドイツに併合されたのであった。

この背景にチェンバレン首相が最大の敵をソビエト連邦と見ていたという事情があった。

ドイツや日本は、ソビエト連邦を抑えるために利用しようとしていたのだ。

一方ヒトラーは、イギリスがソビエト連邦を警戒している限り、自分の要求が通ると考えていた。

その結果は、予想通りであった。

この会議の問題は、出席者にもあった。

まず、当事者であるチェコ代表のベネシユ大統領ボヘミアのコジユラニ出身。独立以前は、プラハのカレル大学講師を務めていたが、第一次世界大戦中、トマーシユ・マサリクの右腕として独立運動を指揮する。1918年から1935年まで外務大臣を務め、1935年からマサリクの後任として第2代大統領に就任。チェコスロヴァキア国民党所属。(Wikipediaから引用) が呼ばれていなかったことである。

フランスと相互援助条約を結んでいたにも関わらず会議に出席できなかったチェコは、フランスとの関係も解消してしまう。

ドイツにとって、チェコがフランスと手を切ったことは好都合であった。

そしてフランスと同盟関係にあったソビエト連邦も会議に呼ばれなかった。

ソビエト連邦最高指導者スターリンはフランスとの決別を決め、ドイツに接近していく。

これが後に独ソ不可侵条約に繋がっていくのであった。

当時まだ下院議員であった、後のイギリス首相チャーチルは、この知らせを聞いて第二次世界大戦は避けられないものになったと嘆いたと言われている。

そして、このミュンヘン会議によって、ドイツはポーランドにあるダンツイヒを奪い返そうとする。

これが直接的な原因となった。

ダンツイヒとは現在のポーランドにあるグダニスク(グダンスク)のことで、ドイツ語ではダンツイヒと表記される。

ここはバルト海に面している海港都市で、中世より繁栄していた。

19世紀にはドイツの貿易港となっていました。第一次世界大戦に敗北したドイツは、ヴェルサイユ条約によりダンツィヒを奪われ、事実上ポーランド領となっていました。

ドイツにとって、ダンツィヒはどうしても取り戻したい都市であった。

そこでダンツィヒ奪還のため、ドイツ軍はポーランド侵入をする事になったのである。

ヴェルサイユ条約でドイツは厳しい軍備制限下に置かれることになった。

これは第一次世界大戦で敗戦国となったドイツを押さえ込む目的でしたが、この厳しすぎる制限が逆にドイツの国家主権の侵害に当たると訴えるナチスの台頭に繋がり、ドイツは再軍備宣言をすることになるのであった。

そしてヴェルサイユ条約で、ドイツ領内なのに非武装地帯と定められていたラインラントに、ドイツ陸軍は軍隊を進駐させる。

ヒトラーは、「イギリス・フランスの事情を考えると反撃してくることはないのでは？」という「賭け」に出たのであった。

この予想が見事的中し、ヒトラーは国民の絶大な支持を得ることになる。

もしこの時、フランスがラインラントに軍を送っていたなら、再軍備したばかりのドイツ軍は負け、ヒトラーも失脚して第二次世界大戦は起こらなかったかもしれない、とも言われている。

ドイツは第一次世界大戦の敗戦国として、ヴェルサイユ条約において1320億金マルク日本円で約200兆円の賠償金支払いを背負いました。

この賠償金完済がつい最近の2010年であったことを考えてみても、尋常ではない金額の賠償金であったことがわかります。

ドイツは第一次世界大戦の影響で国は荒廃し、経済状況も悪く、とても賠償金を払う余地はなかった。

そのため、賠償金支払い滞納を理由にフランスとベルギーは、ルー地方というドイツ西北部の炭鉱地帯でありヨーロッパ有数の工業

地帯を占領してしまう。

これに対しドイツは、労働者が生産を行わないサボタージュを断行して抵抗した。

その結果、ドイツの生産力が低下してインフレーションが起こり、ドイツ経済は危機に瀕してしまう。

ドイツに救いの手を差し伸べたのはアメリカであった。

アメリカがお金を貸すことでドイツ経済の復興とイギリス・フランスへの賠償金支払いが可能となったのである。

これで上手くいくと思ったところが起きたのが、1929年の世界恐慌でした。

そして、ヴェルサイユ体制の崩壊も原因の一つだ。

ヴェルサイユ体制とは、「ヴェルサイユ条約」によって決められた、ドイツの封じ込めを目指す国際的体制のことである。

ヴェルサイユ条約の規定により、史上初の国際平和機構である国際連盟が作られ、世界の平和維持を目指しました。

日本は常任理事国となり、新渡戸稲造は国際連盟事務局次長を務めています。

しかしドイツは再軍備化を進め、1933年に国際連盟を脱退する。

日本も満州国からの撤兵を勧告されたことで国際連盟を脱退した。

また、植民地を増やそうとしていたイタリアも、諸外国の非難を浴びることになり、1937年に国際連盟を脱退したのである。

国際的に孤立を深めた日本・ドイツ・イタリアは日独伊三国防共協定を結び、枢軸体制が出来上がります。

ここにヴェルサイユ体制は崩壊したのです。

そうして始まったのが、歴史に名を深く刻んだ第二次世界大戦であった。

~~~~~

「——とまあ、こんな戦争が起きたんだよ。そして俺達のご先祖様は負けて、そこから学んだんだよ。戦争は碌なもんじゃねえってな」
スマホを支えながら、画面を食い入るように見つめるロウリイに自身の考えを言う竜司。

ロウリイは、未知との遭遇による余韻から夢見心地のようであった。

座り込んだロウリイはスマホを懐にしまう竜司に問いかける。

「……すごいわねえ。こんな戦いが世界を巻き込んで起こったのよねえ?」

「さあ? 俺は戦争を凄いととは思っちゃいねえがな。戦争なんてものはやらなきゃいいんだよ。世界の皆が手を取り合えたのならこんなことも起こらなかつたかもしれないねえな。ま、それもまた夢物語」

「帝国との戦いかしら?」

「ああそうさ。奴さんは俺達が平和に暮らしていたところを問答無用で攻撃してきて、結果、何百人もの人が死んだんだ。まったく……腹が立つことこの上ない」

憎々しげに指を鳴らす竜司の体から魔力が漏れる。

あまりの圧に全身の毛が逆立ったような感覚に陥るロウリイ。

そんな竜司の姿を見つめながら、ロウリイは不思議そうに言った。
「あなたならあ指示も無視してえ帝国に殴り込みに行けるのではなくてえ?」

「……やろうと思えばできるだろう。だがやつちやいけねえんだ。俺達は過去を通して学んだんだよ」

「そうねえ……愚問だったわあ……」

今まで見せてもらった記録から、彼等はそんなことをするような人ではないと判断する。

そんなロウリイは立ち上がり、踵を返して去ろうとした。

「どうした嬢ちゃん? まだ聞きたいことがあるんじゃないのか?」

「あなたの話を聞いてえ俄然聞きたいものがたくさんできたわあ。でもお……」

引き留めようとする竜司の声に、振り返ったロウリイはこう言う。「気が立っている猛獣のようになってしまったあなたの傍に居たらあ、喰い殺されてしまうかもしれないわあ。というわけでえ、話はまたの機会にさせてもらおうわあ」

「……そうか。気を遣わせてすまなかつたな。道に迷うなよ」

竜司の心配する言葉に、後ろ手に手を振りながら別の場所に向かっていくロウリイ。

一人残された竜司は懐から、タバコを取り出し、指先に点けた火によつて先端を燃やし一服する。

「フウ……俺も、まだまだだな……魔力が漏れ出ちまうなんて」

そう呟いた後、どこかへと歩き出す。

帝国の未来はどうなるか……

現時点では分からないままであった。